

# 前の原遺跡

飯田市竜丘保育園移転新築工事に伴う  
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1990年3月

長野県飯田市福祉事務所  
長野県飯田市教育委員会

# 前 の 原 遺 跡

飯田市竜丘保育園移転新築工事に伴う  
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1990年3月

長野県飯田市福祉事務所  
長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市竜丘地区は飯田市街地の南部、天竜川右岸に位置し、四方は松尾、伊賀良、川路、下久堅、龍江に接している。竜丘地区付近から天竜川は深く谷を刻みはじめ、川沿いの平坦部は少なくなるが、竜丘面を中心にその温暖な気候は座光寺地区などとともに農業に適し、快適な生活環境の地域のひとつです。

一方、太古より人々が活動した痕跡はその各所に刻まれており、縄文時代中期には大規模な集落が本遺跡や新川を挟んだ安宅遺跡などで営まれています。また古来交通の要衝に位置し、大規模な前方後円墳など数多くの古墳が集中しており、座光寺・松尾地区を凌ぎ市内最多を数えます。

近年飯田市街地における開発は飽和状態に達し、周辺地区的道路環境の整備が進みつつある状況と相俟って、市街地周辺へ企業や住宅が拡散しつつあります。この竜丘地区においても宅地化が進み、人口増加の傾向にあります。このため老朽化・狭小化した竜丘保育園の園舎の建て替えが急務がありました。

一方、竜丘保育園周辺は埋蔵文化財包蔵地前の原遺跡として登録されており、消滅したものの前の原1～6号墳など多くの埋蔵文化財に恵まれた所で、その保存は我々の責務であります。しかし、保育園のもつ高い公共性や、静閑でしかも竜丘小学校に隣接する教育環境に適した地域であることなど隣接地での建設はやむを得ないものと言えます。

このような経緯で、前の原遺跡の発掘調査を飯田市教育委員会が実施したわけであります、調査にあたり深く理解と協力をいただいた飯田市福祉事務所、現地調査に従事された作業員の方々、並びに関係各位に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成2年3月

飯田市教育委員会  
教育長 福島 稔

## 例　　言

1. 本書は飯田市竜丘保育園移転新築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地前の原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市福祉事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、昭和63年5月9日～10日に発掘調査を実施し、本調査を昭和63年6月15日～7月30日に実施した。統いて平成元年度末まで整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 今次調査地点は昭和45・49年度に実施された調査地点とは接していないが、同一遺跡内に位置するため連続する遺構番号を付した。
5. 発掘調査及び整理作業においては一貫して遺跡名にKMHを用いた。
6. 本報告書の記載については、記載順は住居址を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は、小林正春・佐合英治・馬場保之が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお本文の一部について小林が加筆・訂正を行った。
8. 本書に掲載された図面類の整理・遺物実測は馬場があたった。遺物の写真撮影は功力司が担当した。なお同作業実施にあたり佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊・功力司及び整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合・馬場が行い、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で、節理面は斜線で示した。
12. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

## 本文目次

序

例言

目次

I	経過	1			
1.	調査に至るまでの経過	1			
2.	調査の経過	1			
3.	調査組織	2			
II	遺跡の環境	3			
1.	自然環境	3			
2.	歴史環境	5			
III	調査結果	9			
1.	遺構と遺物	9			
1)	竪穴住居址	9			
①	25号住居址	② 26号住居址	③ 27号住居址	④ 28号住居址	
⑤	29号住居址	⑥ 30号住居址			
2)	掘立柱建物址	20			
①	掘立柱建物址 1	② 掘立柱建物址 2	③ 掘立柱建物址 3		
3)	柱列址	22			
①	柱列址 1	② 柱列址 2			
4)	竪穴	22			
①	竪穴 1				
5)	集石	23			
①	集石 1				
6)	土坑	24			
①	土坑12	② 土坑13	③ 土坑14	④ 土坑15	⑤ 土坑16
⑥	土坑17	⑦ 土坑18	⑧ 土坑19	⑨ 土坑20	
7)	柱穴	27			
8)	その他	27			
①	遺構外出土遺物				
IV	まとめ	38			
	参考文献	40			

## 挿図目次

挿図 1	調査遺跡及び周辺遺跡位置図	4
挿図 2	調査位置及び周辺地図	7
挿図 3	遺構全体図	8
挿図 4	25号住居址	9
挿図 5	25号住居址カマド	10
挿図 6	26号住居址	12
挿図 7	26号住居址カマド	13
挿図 8	27号住居址	14
挿図 9	28号住居址	16
挿図10	28号住居址カマド	17
挿図11	29号住居址、カマド	18
挿図12	30号住居址	20
挿図13	掘立柱建物址 1	21
挿図14	掘立柱建物址 3	21
挿図15	堅穴 1	23
挿図16	集石 1	24
挿図17	土坑12~20	25
挿図18	柱穴平面図(1)	28
挿図19	柱穴平面図(2)	29
挿図20	柱穴平面図(3)	30
挿図21	柱穴平面図(4)	31
挿図22	柱穴平面図(5)	32
挿図23	柱穴平面図(6)	33
挿図24	柱穴平面図(7)	34
挿図25	柱穴平面図(8)	35
挿図26	柱穴平面図(9)	36
挿図27	柱穴平面図(10)	37

## 付図目次

付図 1 堀立柱建物址 2、柱列址 3・4

## 図 版 目 次

第1図	25・26号住居址出土土器	42
第2図	26号住居址出土土器	43
第3図	26号住居址出土土器	44
第4図	26号住居址出土土器	45
第5図	26号住居址出土土器	46
第6図	26号住居址出土土器	47
第7図	26号住居址出土土器	48
第8図	26号住居址出土土器	49
第9図	26号住居址出土土器	50
第10図	27号住居址出土土器	51
第11図	28号住居址出土土器	52
第12図	28号住居址出土土器	53
第13図	28号住居址出土土器・石器	54
第14図	29号住居址出土土器	55
第15図	29号住居址出土土器	56
第16図	30号住居址・窓穴1・集石1出土土器	57
第17図	集石1出土土器	58
第18図	集石1出土土器・石器	59
第19図	土坑13・16~19、遺構外出土土器・石器	60
第20図	遺構外出土石器	61
第21図	遺構外出土石器	62
第22図	遺構外出土石器	63
第23図	遺構外出土石器	64
第24図	26・27号住居址、遺構外出土石器	65

## 写 真 図 版

- 図版1 遺構分布状況
- 図版2 25号住居址 カマド・断面
- 図版3 26号住居址 カマド
- 図版4 26号住居址遺物出土状態

- 図版5 27号住居址 28号住居址
- 図版6 28号住居址カマド・断面
- 図版7 28号住居址遺物出土状態
- 図版8 29号住居址 カマド
- 図版9 29号住居址遺物出土状態・30号住居址
- 図版10 掘立柱建物址 1 2
- 図版11 柱列址 3・4 柱列址 3
- 図版12 柱列址 4 柱列址 3・4 接点
- 図版13 壺穴 1 集石 1
- 図版14 土坑12 土坑13・14
- 図版15 土坑15 土坑17~19
- 図版16 25・26号住居址出土土器
- 図版17 26号住居址出土土器
- 図版18 26号住居址出土土器
- 図版19 26号住居址出土土器・石器 27号住居址出土土器
- 図版20 28号住居址出土土器
- 図版21 28号住居址出土土器・石器
- 図版22 29号住居址出土土器
- 図版23 壺穴 1 出土土器 集石 1 出土土器 土坑13・16~18出土石器
- 図版24 遺構外出土石器 26・27号住居址出土鉄製品
- 図版25 試掘調査風景 表土除去作業
- 図版26 発掘調査風景
- 図版27 発掘調査風景 現地説明会風景

## | 経過

### 1. 調査に至るまでの経過

前の原遺跡は飯田市桐林378番地他に所存する。

桐林地籍は飯田市南部に位置する竜丘地区のほぼ中央にある。竜丘地区は古来交通の要衝にあり、またその地形・温暖な気候は生活に適した所として数多くの文化財が残されてきた。殊に前方後円墳をはじめとする多数の古墳が集中しており、その歴史的意義は飯田下伊那にとどまらず全国的視野にたって評価することが必要である。前の原遺跡はこうした諸古墳に隣接するのみでなく、繩文時代中期の集落址としてつとに知られていた。昭和45年には飯田高等学校考古学研究会によって竪穴住居址1軒が調査され、該期の良好な資料が得られた。また昭和49年には農業構造改善事業に伴って発掘調査がおこなわれ、繩文時代中期および古墳時代後期の遺構が多数発見された。後者は周辺の諸古墳築造の基盤となる生産の拠点として注目された。

近年、飯田旧市街地は企業・住宅等飽和状態に達し、市街地が近郊に拡散しつつある。この傾向は竜丘地区においても認められ、住民数は増加傾向にある。このため、老朽化した保育園舎では手狭となり、新園舎建設は急務であった。一方、竜丘保育園は小学校に隣接し静閑であり、優れた教育環境にある。また竜丘地区のほぼ中央に位置し、通園の利便に適している。それ故、隣接地での建設もやむを得ないものであった。

このため、関係諸機関で協議を重ねた結果、農業構造改善事業施工にあたり諸遺構に影響が及んでいることも考えられるため、とりあえず、試掘調査を実施してその結果に基づいて再度協議することとした。

### 2. 調査の経過

関係諸機関の諸協議に基づき、昭和63年5月9日～10日試掘調査に着手した。用地全体の状況を把握するように、5本のトレンチを設定し、重機により表土を剥ぎ、作業員を入れて遺構検出作業を行なった。その結果、当初の予想に反して農業構造改善事業の実施にもかかわらず擾乱は地表から30～40cm程度しか及んでおらず、遺構の残存状態も良好なことがわかった。そして各トレンチにおいて竪穴住居址・土坑等の遺構の存在が確認された。そこで改めて協議を行なった結果、建物部分全体について発掘調査を実施することとなった。

6月15日本調査に着手した。重機により建物部分について全面表土を剥ぎ、調査区を設定した。調査区は用地北側中央の隣地境界杭を基準点、これと用地西北隅の道路端の隣地境界杭を結ぶ線

を基準軸に2m×2mの小グリッドを設定した。基準軸は磁北に対し59.0西に偏する。各小グリッドは基準点から南に向かってAA・AB・AC……AY・BA……、また基準軸に平行する方向に対しては基準点から西に14・15・16……と数を増し、東へは13・12・11……と数を減ずる。

重機による荒土を除去し、引き続いて遺構検出作業を行なった。その結果、古墳時代後期に属する竪穴住居址6軒のほか掘立柱建物址・柱列址等を検出した。これらについて精査し、写真撮影・測量調査を実施し、7月30日現地作業を終了した。この間7月12日竜丘小学校4・5年生が見学に訪れ、7月17日には約150人を集め現地説明会を実施した。

その後、引き続き飯田市考古資料館において、遺物の水洗・注記・接合・復元・実測作業ならびに現地で記録された写真・図面類の整理を行ない、平成2年3月末まで報告書作成作業にあたった。

### 3. 調査組織

#### (1) 調査団

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川豊 馬場保之 功力司

作業員 細田七郎 高橋収二郎 松下直市 高橋寛治 木下当一 大島利男 森章

高木義治 産田多久三 平沢今朝光 福沢トシコ 正木実重子 坂下やすゑ

北村重実 中平隆雄 吉川正実 萩原和一 木下和子 横井近枝 篠田久雄

木下傳 森山昇 篠田道夫 中島秀津江 中村亮平 深尾由香

整理作業員 池田幸子 大藏祥子 唐沢古千代 川上みはる 木下玲子 柳原勝子

小平不二子 田中恵子 丹羽由美 林勢紀子 橋本宣子 福沢育子

福沢幸子 牧内とし子 牧内八代 松本恭子 南井規子 宮内真理子

森信子 吉川悦子 吉川紀美子 吉沢まつ美

#### (2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦 (社会教育課長)

中井洋一 (社会教育課文化係長)

小林正春 (同上 文化係)

吉川 豊 (同上)

馬場保之 (同上)

功力 司 (同上、平成元年度)

土屋敏美 (庶務課、昭和63年度 社会教育課文化係、平成元年度) (馬場保之)

## II 遺跡の環境

### 1. 自然環境

前の原遺跡は、飯田市桐林に所在する。桐林は、旧竜丘村桐林で、竜丘地区のほぼ中央部に位置する。

竜丘地区は、飯田市街地から4～8km離れた天竜川西岸にあたり、標高340～560mの間にある。四囲は、地形の変化により隣接の地区と境を成している。北は毛賀沢川により松尾・鼎と、東は天竜川により下久堅・龍江と、南は久米・茂都計川により川路と、そして西は上位段丘端部により伊賀良地区とに囲まれたほぼ方形の範囲である。

地区内は段丘地形をもって原則的に捉えられるが、それを大小の天竜川支流が開拓し、小地域毎の地形変化は多様である。大きくは西側の段丘端部にあたり伊賀良地区と境を接する付近が丘陵状の山間地となり、その東方一帯にあたる地区内の大半は段丘平坦面が連続する。また、天竜川の各支流の両側は山間部・段丘面部分ともに深く浸食された谷地形を成している。

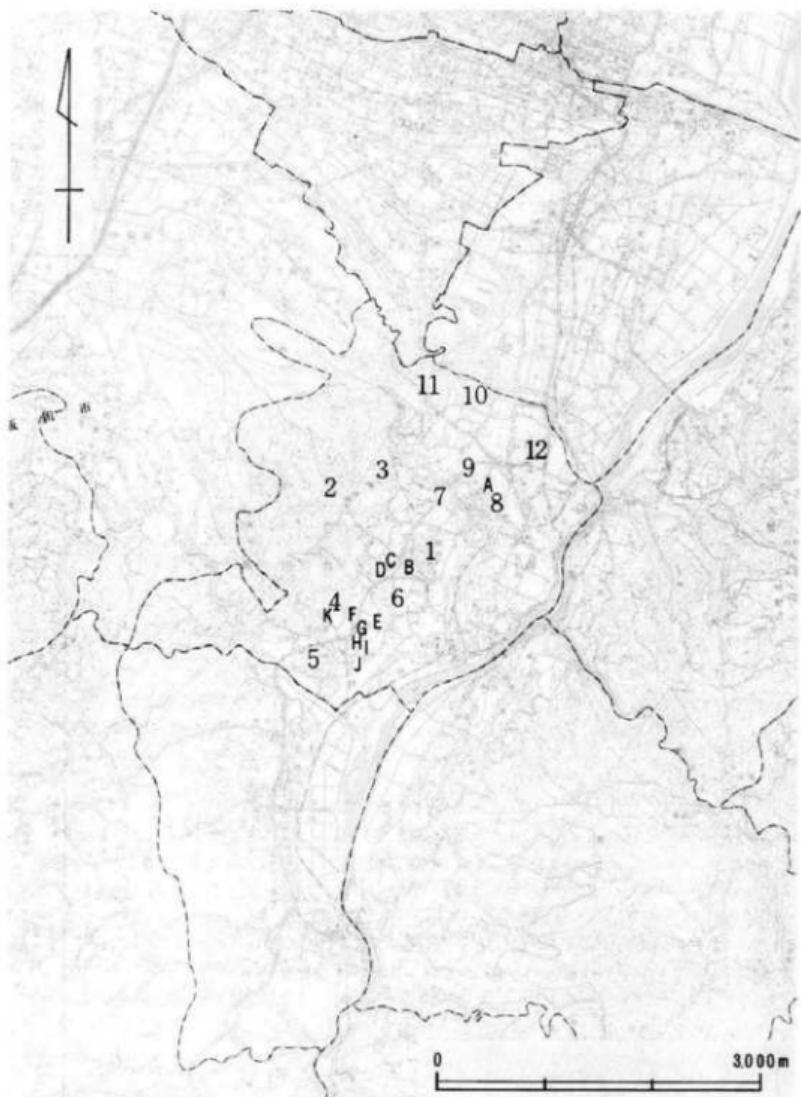
土地利用の姿は、前述の地形差により、山林・畑地・水田とに分けられる。中世大井の通水により、長野原台地上の水田開発はあったものの、大きくは自然地形の条件下で、古代からの土地利用形態を踏襲していると考えられる。

なお、竜丘地区は飯田市街地の南方に位置し、標高も10数m低く、地区全体が東あるいは南面する地が主体であり、特に冬期の生活環境は市内でも優位に位置づけられる。

また、地区内西端に連続する丘陵地は、様々な植生の分布が認められ、駄科・桐林・上川路の各地には、市指定天然記念物「ギフチョウ」の繁殖地もあり、近年市街地化の進行する地区であるにもかかわらず、優れた自然環境の地といえる。

次に、前の原遺跡のある桐林地区について若干その環境を示すと、北は新川の深い谷により駄科地区と境し、南は臼井川により上川路地区と境する。西は前述の丘陵により伊賀良地区、東は中位段丘崖や浸食谷により長野原・時又地区とに囲まれた竜丘地区の中心部にあたる。天竜川にこそ面することはないが自然環境は、前述の竜丘地区全体のあり方そのものが当地区においてあるといえる。

また、前の原遺跡の所在する地は、桐林地区全体からみれば東端にあたり、中位の段丘面上にある。周囲は、近年宅地等の諸開発の進行が著しいが、本来比較的高燥な地であり、大半が桑園として活用されていた。なお、遺跡の西方は、一見同一段丘面が連続するが、現国道151号付近から西方段丘崖下にかけて大きな湿地帯を成しており、水田地帯が連続する。この湿地帯を主要な生産基盤として立脚した集落の1つが当前の原遺跡であることができる。



- 1. 前の原遺跡
- 2. 竜丘古窯址群（宮洞・河内洞・堤洞）
- 3. 前林庵寺
- 4. 茅田遺跡
- 5. 上川路庵寺
- 6. 小池遺跡
- 7. 内山花の木遺跡
- 8. 宮城遺跡
- 9. 安宅遺跡
- 10. 駄科北平遺跡
- 11. 鈴岡城址
- 12. 大島遺跡
- A. 権現堂1号古墳
- B. 丸山古墳
- C. 大塚古墳
- D. 兼清塚古墳
- E. 塚原二子塚古墳
- F. 塚原3号古墳
- G. 鏡塚古墳
- H. 鏡塚古墳
- I. 黄金塚古墳
- J. 金山二子塚古墳
- K. 茅田古墳

図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図

## 2. 歴史環境

当地区内には、禪宗の古刹開善寺が所在したり、当地方を代表する中世山城である長野県史跡鈴岡城跡の存在など、中世以降の文献に示された歴史事実の内容が多岐にわたっていることはいうまでもないが、それ以前の文字資料の欠落した時代においても、様々な特徴を持って歴史が動いていたと推測される。

それは、138基を数える古墳が地区内全域に築造された事実があり、また、様々な時代・内容の埋蔵文化財包藏地の所在が知られており、古くより人々が定着し、生活し続けて来た地であることが示されることによる。

地区内においては、昭和42年に国道151号の改修に伴って鏡塚古墳の発掘調査を実施したのを皮切りに、10ヶ所を越える埋蔵文化財包藏地（遺跡）の発掘調査が行なわれている。それにより、地域における新しい事実が積み重ねられ、地域の歴史解明にいくつかの示唆を与えてくれた。

竜丘にいつ頃から人々が生活したかについて、具体的に示されたのは、当前の原遺跡・宮城遺跡、駄科北平遺跡・安宅遺跡などから縄文時代中期の竪穴住居址が発見されたことによる。

いずれも、狭い調査範囲に検出されたもので、調査範囲外にはさらに多数の住居址等が存在すると予測される。これらは、安定した自然環境の中で、かなり大規模な集落が形成されていたと判断される。

現状では、これより古い時代の資料について竜丘地区内で確認されていないが、近年市内各所で実施される遺跡発掘調査により、今まででは考えられなかったような場所から予想外の資料が発見されることもあり、より古い時代から竜丘に人々の居住していた事実が明らかになる可能性はきわめて大きいといえる。

続く弥生時代に至ると、その初期から中期段階での生活痕跡は、わずかに認められる程度であるが、後期段階においては、当地方全体の傾向と合致して、數・規模とともに爆発的に増大する姿が竜丘地区内でも認められる。その具体的な姿は、駄科安宅・大島遺跡・桐林蒜田遺跡などで竪穴住居址が確認されており、また、発掘調査等は行なっていないが地区内の全域から同時代の土器や石器が採集されており、かなりの広範囲に人々の生活した場のあったことがうかがえる。

弥生時代の後、古墳時代の初期は弥生時代後期と同様の状況と考えられるが、古墳時代後期に至ると、地区内に築造された古墳総数138基が示すとおり、市内はもちろん長野県全体から見ても該期の中心的な位置づけのなされるところである。

これらの古墳は、古墳時代全体を通じて造られたわけではなく、その後半の5世紀以降に属するものがほとんどである。このことは古墳文化を汎日本的に捉えたときに、1つの特徴的な姿を読み取ることができる。それは畿内における大和王権による大古墳築造のあり方と、日本全国へ向けての勢力拡散の姿を1地域内においても同様な姿として捉えられることである。すなわち、

この竜丘の地が、5世紀を契機として、畿内の巨大勢力と結びついた地として考えられ、さらには大和王權による東国經營の拠点として、きわめて重要な地であったことを示すにほかならない。

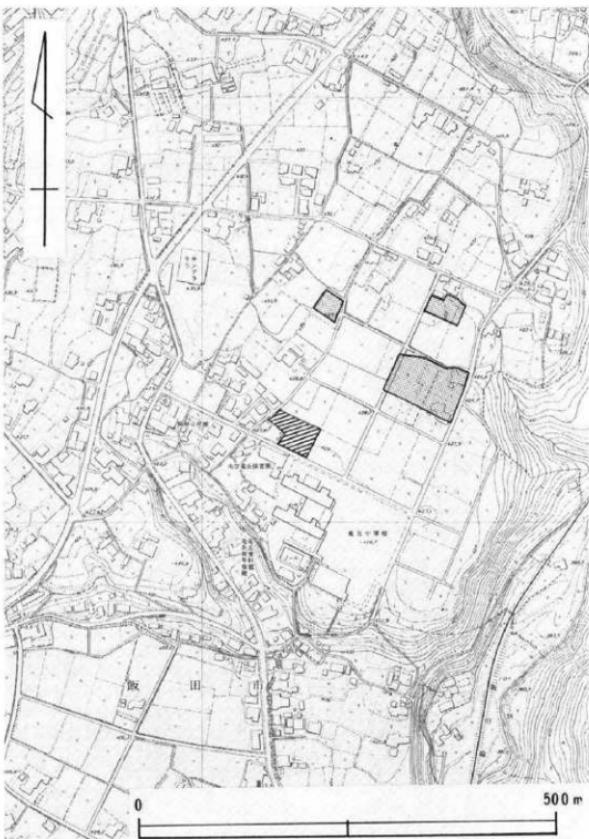
そのような、汎日本的な位置づけのなされる中で、地区内において当然のことではあるが140基の古墳に葬られた人々も、また、それを造る作業に直接従事した人々も居住していたわけであり、それが、地域内各所の遺跡として位置づけられる。現在までに発掘調査により、住居址等の確認された遺跡は、駄科安宅・大島遺跡、桐林の当前の原遺跡などがある。それらは、当時の集落全体からみればごく一部分であり、個々の集落についてもほんの一部が解明されたにとどまっている。今後の調査等により、居住地と古墳（墓所）との関連が具体的に示される地としても注目されるわけである。

隆盛した古墳時代に続く、奈良・平安時代にも引き続き様々な歴史事象が展開した。大和朝廷の確立とともに、中央政治が地方にも浸透する姿があり、当地区内においても、それまで活発であった古墳築造はなされなくなる。しかし、古墳を造り続けた地域勢力は、その結集した姿として仏教文化を接受し、寺院の築造を果している。それが、開善寺西境内に所在した上川路庵寺であり、前林庵寺である。また、それに関連して、様々な経済活動の姿が認められ、特筆事項の1つとして、当地方屈指の須恵器生産地であったことが示される。

さらに、中世以降の地区内の様相としては現在の開善寺にあたる開禪寺の開基、鈴岡城の築城など行なわれ、当地方の中心的な地区としての位置づけは動かないものがある。

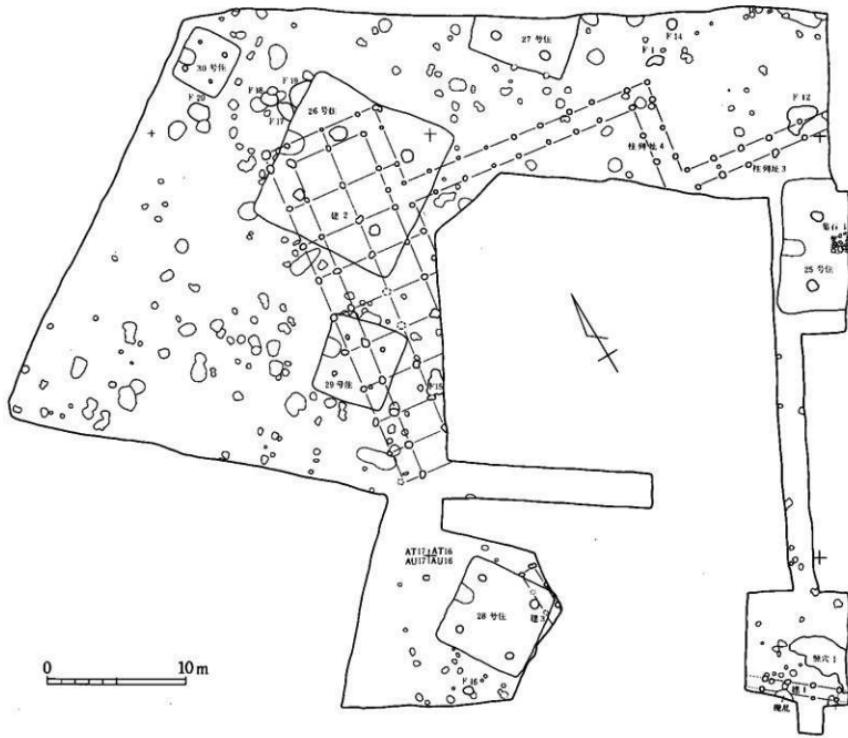
以上、竜丘地区内の文化財により示される歴史事象を列挙したが、いずれの時代においても伊那谷の中核的な位置づけのなされる地としての姿があるといえる。

(小林正春)



昭和63年度調査位置 昭和49年度調査位置

挿図2 調査位置及び周辺地図



插図3 遺跡全体図

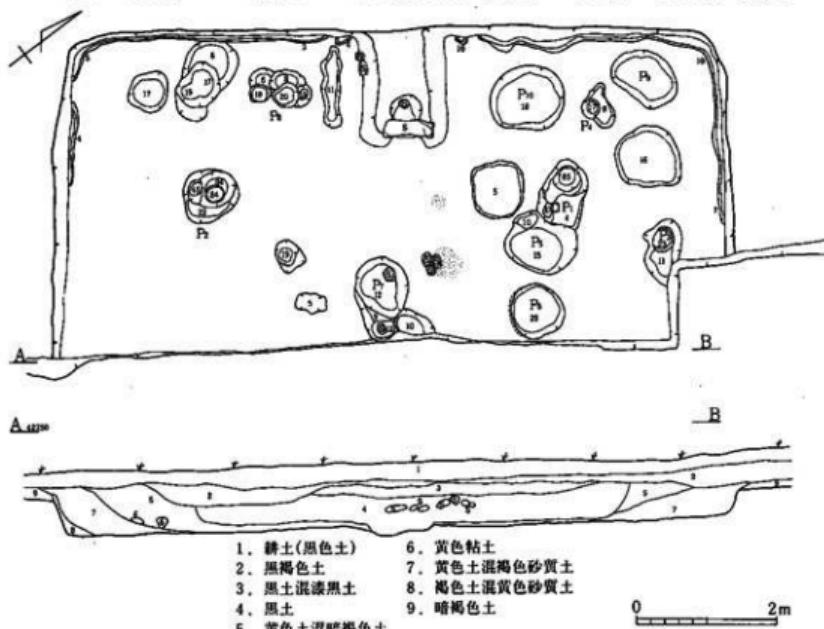
### III 調査結果

#### 1. 造構と遺物

##### 1) 壺穴住居址

###### ①25号住居址 (挿図4・5、第1図)

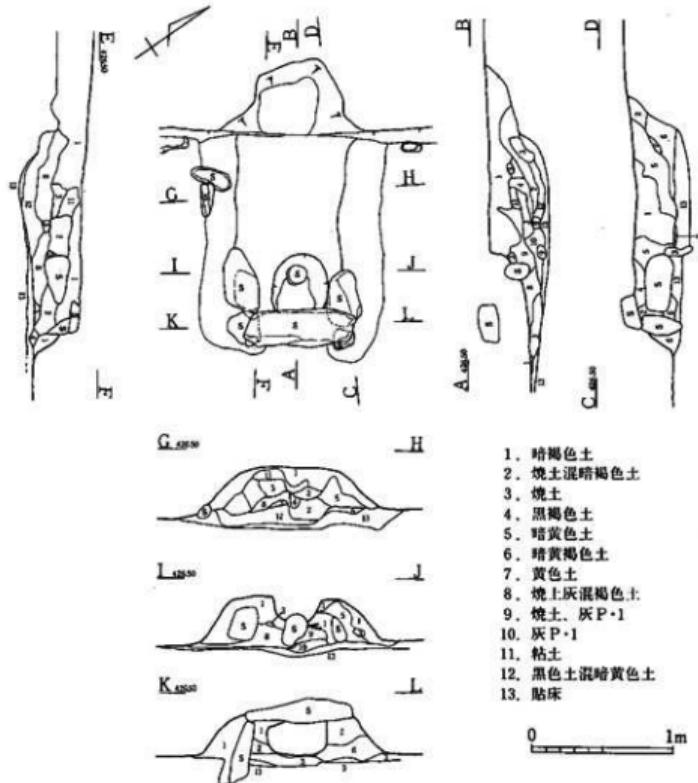
調査範囲、南東端のトレンチ調査部分にかかるて検出した。用地境まで拡張したが調査できたのは全体の%程である。隅丸方形壺穴住居址で、規模は全体を確認した北西壁で9.2mを測る。主軸方向はN56.5°Wを示す。覆土は黄色土混じり暗褐色土と、黄色土混じり褐色砂質土がレンズ状の堆積を成している。確認した壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、35~48cmを測る。周溝は南北壁下部分で床面が軟弱であったため、やや掘りすぎ確認できなかったが、壁直下を全周していたと思われる。幅5~15cm、深さ3~13cmを測る。床面は南側の一部を除いて叩き状の良好な



挿図4 25号住居址

ものである。主柱穴は4本主柱穴と考えられるが、このうち2本を把握した。両者とも歪んでおり、底部に2ないし3の凹が認められ、同位置での建て替えが考えられる。最大径90cm、最深部85cmを測る。ほかに本址に伴う施設として、出土した遺物から北隅と、カマド右側の穴が考えられる。焼土等は認められず、性格は不明である。カマドは北西壁の中央に作られており、きわめて良好な状態で残る石芯粘土カマドである。また、カマド前5mの範囲には多量の焼土が認められた。集石1の周辺で平安朝の遺物が出土し、土層の観察から壁と堅く締まった焼土を伴う床面が把握でき、火事にあった別の住居址の存在が確認された。しかし、この住居址の詳細は不明である。

出土遺物は、比較的少ない。器形の知れるものとして、土師器には図1～4がある。1・2は球形洞となるもので、1は洞がやや長くなるものである。3は壺の可能性もある底部で、4



挿図5 25号住居址カマド

は小形のものである。壺(5)は比較的浅いもので、口縁部内側下部に緩い稜をもつ。ほかに高壺(6)がある。須恵器には壺(7)、蓋(8)があり、壺の内面はなで成形されている。

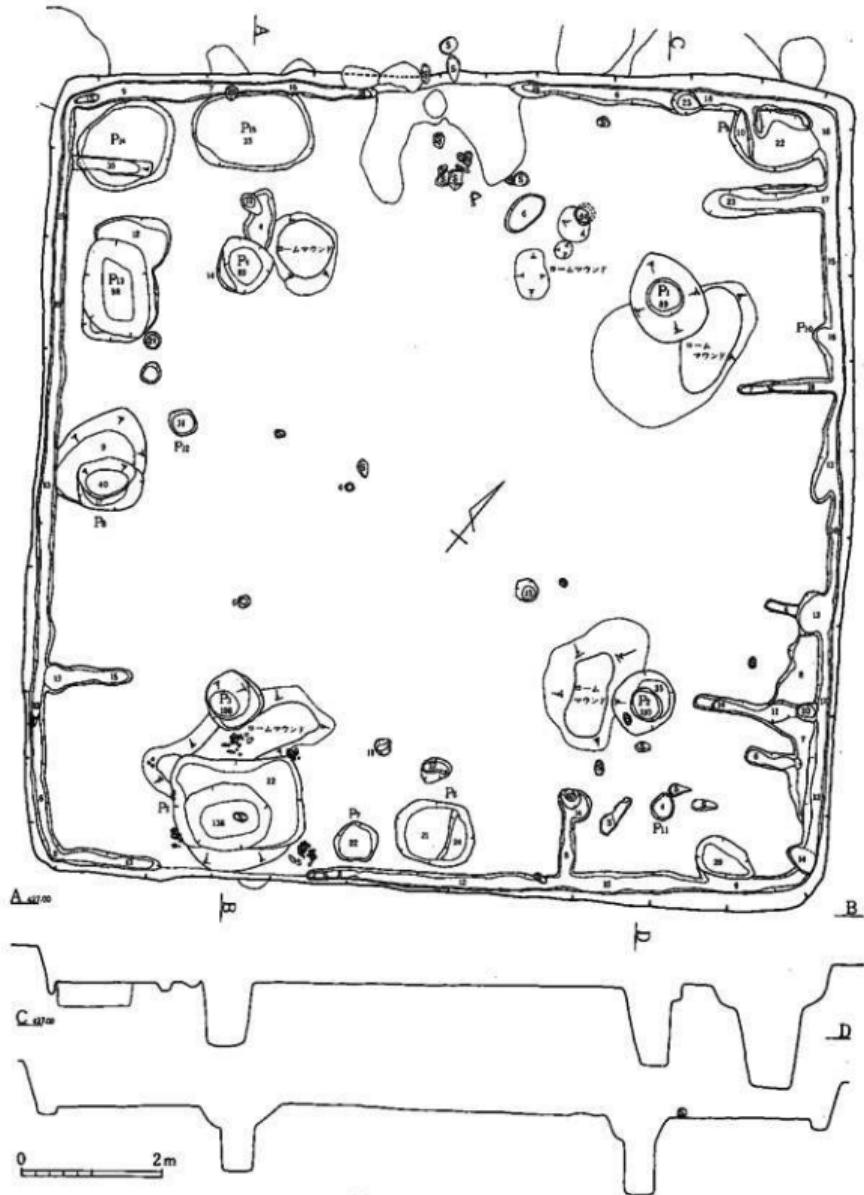
時期は、古墳時代後期に位置づけられる。

(佐合英治)

②26号住居址 (挿図6・7、第1図9～第8図、等24図5・6・8・9)

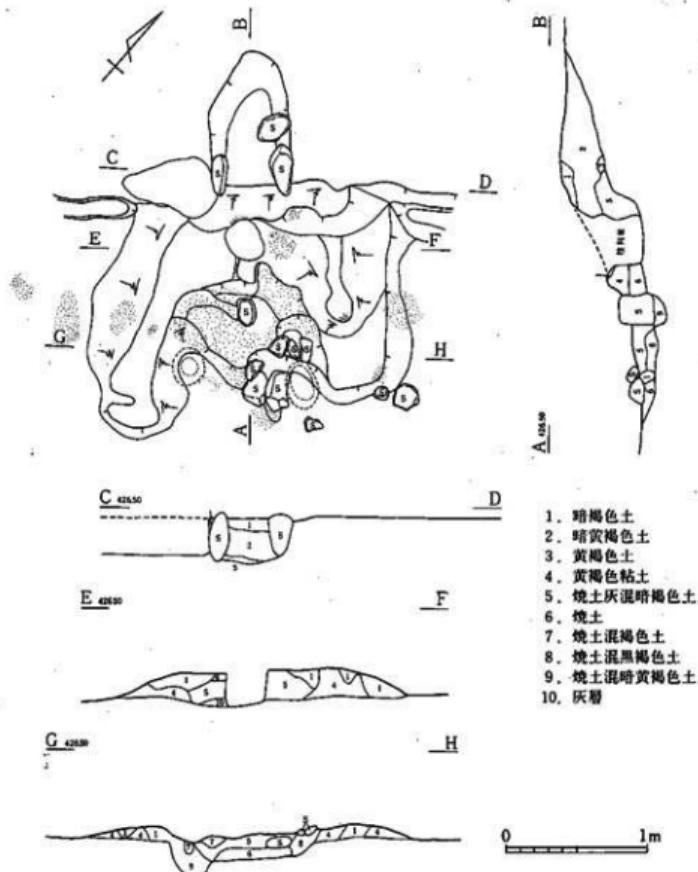
AG13グリッドを中心に検出した。27・29・30号住居址の中間に位置する。東西11.2×南北11.0mの方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN33.0°Wを示す。覆土はほとんどが黒褐色土であり、床面上に黒色土がレンズ状に堆積しているのが認められた。カマド前面に焼土・炭化材が多量に出土した。壁高は55～65cmを測り壁上部まで急な立ち上がりが良好な状態で確認された。周溝は壁直下にはほぼ全周して検出され、深さ6～18cmを測る。幅15～30cmで、底面の状態は平坦である。ローム層を掘り込んでいるため床面はきわめて締まっている。主柱穴は4本確認され、不整円形を呈し径45～80cmを測る。深さは北壁側が約90cm、南壁側が約110cmとやや深い。主柱穴の周囲には掘り出されたと考えられるロームがマウンド状に確認された。住居址内に伴う穴はP5～P15であり、このうちP5は深さ138cmを測る方形の掘り込みで、底面が平坦であり貯蔵穴であると思われる。埋土上部から遺物が集中出土した。P5の四隅および北辺中央に小礫が配置されていた。P6・7・13・14は貼床下から検出され、焼土・炭が多量に含まれる。P13は形態等P5と共通しており、やはり貯蔵穴と思われる。P15も焼土・炭が多量に含まれるが、貼床は確認されず最終段階の施設といえる。北壁を除く三辺には周溝に連続して同じ形態の溝が壁に垂直に掘り込まれていた。間仕切りと考えられる。北壁ほぼ中央に位置するカマドの原形は不明であるが、壺の中程以下に焼土・粘土があり、粘土カマドと考えられる。焚き口付近に扁平な礫が集中する。煙道両脇に礫が確認された。

遺物は土師器壺・壺・壺・高壺・鉢・瓶・須恵器壺・蓋壺・器台・砥石・台石等があり、出土量が多い。土師器壺(第1図9)は内外面赤褐色を呈しており、内面はヘラナデ、口縁部付近に横ナデが施されている。土師器壺10は二次焼成を受け外面特に口縁付近の器面荒れが著しい。第2図1は胴部が球形に張った器形である。内外面の器面荒れが著しく、外面の一部に炭化物が付着する。4は内面頸部にクシ状工具により調整が施され、以下横方向のナデが施されるが、指おさえ痕を残す。第3図3・4はやはり球形胴を呈し4は頸部以下外面に右下がり斜位ないし縦位のハケ調整が施される。第4図1は口縁部がやや内湾しており、張り出しが大きい。4は胴中央以上に最大径をもつ。5は長胴の壺で底部が台状にやや張り出す。内外面とも籠ナデが施されるが、粘土紐積み上げ痕を僅かに残す。第5図1・2はともにP15からの出土であり、1は刷毛調整後外面に斜位の粗い箇ミガキが施される。4の上半および7のそれぞれ外面には炭化物が付着している。5は外面および底部の一部に箇ミガキが施されており、内面は二次焼成を受けはせている。土師器壺は個体数では本址のうち最も出土しており、そのうち二次焼成を受けたもの(第



### 挿図6 26号住居址

6図2・16、第7図4・10)が多い。第6図2は胴下半に細密なクシ状工具による調整が施される。8~10は浅い口径の小さい坏である。14は器壁が厚く、粘土紐巻き上げ痕を内外面に不明瞭ながらとどめる。底部付近にクシ状工具による調整痕が観察される。第7図9は口径の歪みが大きい。11は底径が大きく器壁は急に立ち上がり口唇が外反する。高坏(第8図1)は坏・脚部ともに段をもつ。2は差し込み式の脚付鉢で、胸部に最大径をもつ。瓶3はP15から出土し、外面から内面に穿孔される。須恵器蓋坏(第8図4)は胴下半が張る。器台(6)は図上復元である。



插図7 26号住居址カマド

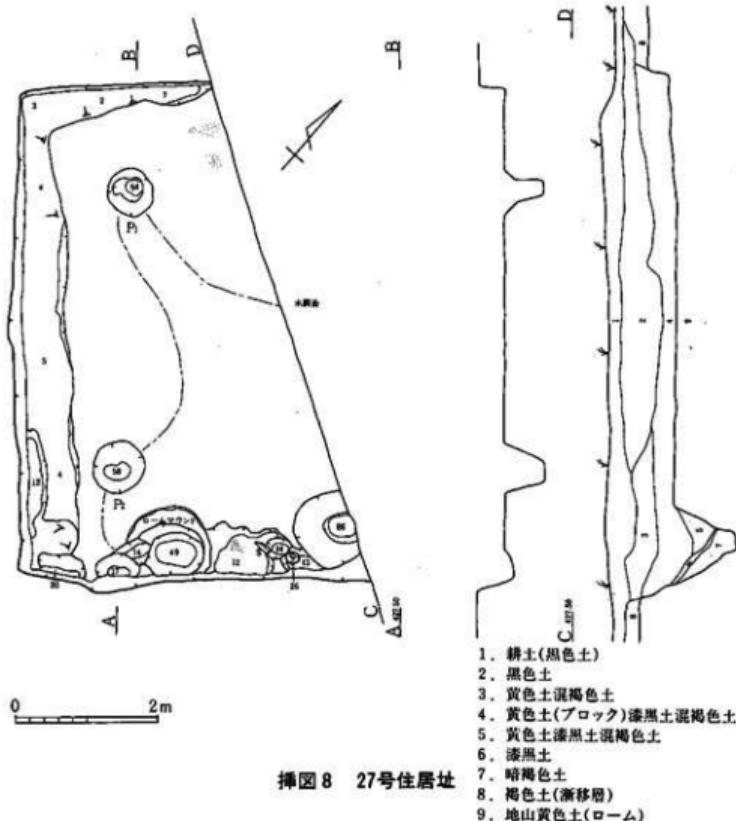
が8ヶの透かし穴をもつと思われる。砥石（第9図1～3）のうち2は火を受けている。

出土遺物から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

（馬場保之）

③ 27号住居址（挿図8、第10・24図）

北東部、調査範囲のはば中央に確認した。北東側は用地外に延びている。全体の $\frac{1}{2}$ が調査できた。隅の部分も良好な保存状態で残る方形の堅穴住居址である。規模は全体を把握した南西壁一片が46.8mを測る。確実な主軸方向は不明であるが、北隅の床面に焼土が認められ、この部分にカマドがあるとすれば、軸方向はN39.5°Wを示す。覆土は褐色土に漆黒色土とブロック状の黄色土が混入しており、人為的に埋めているものと考えられる。壁面は垂直に立ち上がっており、高さは22～47cmを測る。いわゆる周溝は確認できなかったが、北西と南西の壁下は、幅20～60cm、



挿図8 27号住居址

深さ3～5cmの溝状の凹部となった。床面は確認した部分の東側がきわめて堅く良好なもので、壁に近づく程軟弱なものとなる。主柱穴は調査できた部分で2本を確認し、全体では4本主柱穴になるものと考えられる。掘り方壁面は比較的緩く掘られている。直径は70cm前後で、深さは床面から55cm程度を測る。ほかに本址に伴う施設として南東壁下の大小の穴がある。用地境にかかるて確認された穴は深さ86cmを測る深いもので、中間に稜をもっている。いわゆる貯蔵穴と思われる。南隅に近い大きな穴の脇には4cm程のマウンドが土手状に認められた。貯蔵穴とこの穴の間は径25cm前後の穴を伴う10cm程の凹みとなっており、入り口施設と考えられる。また、凹み部分には焼土がわずかに認められたが、性格は不明である。カマドは床面上に検出された焼土の状態から、北西壁に作られているものと思われるが、詳細は不明である。

出土遺物は、少ない。図化できるものには土師器として壺(第10図1)、鉢(2・3)、瓶(4)がある。壺は器高の低いもので、口縁部が垂直に立ち上っている。2の鉢は内面にクシ状工具痕を残している。3は口縁端部が丸く仕上げられるもので、やや内湾している。瓶は多孔で小形なものである。須恵器には壺(5)、高杯(6)、豆(7)がある。6の高杯部はしっかりとした稜をもち、これより上部は垂直に近い立ち上がりとなる。豆は大形のものである。ほかに、滑石製の臼玉(第24図7)、鉄製品として鉄鎌(8)がある。

時期は、古墳時代後期に位置づけられる。

(佐合 英治)

#### ④28号住居址(挿図9・10、第11～13図)

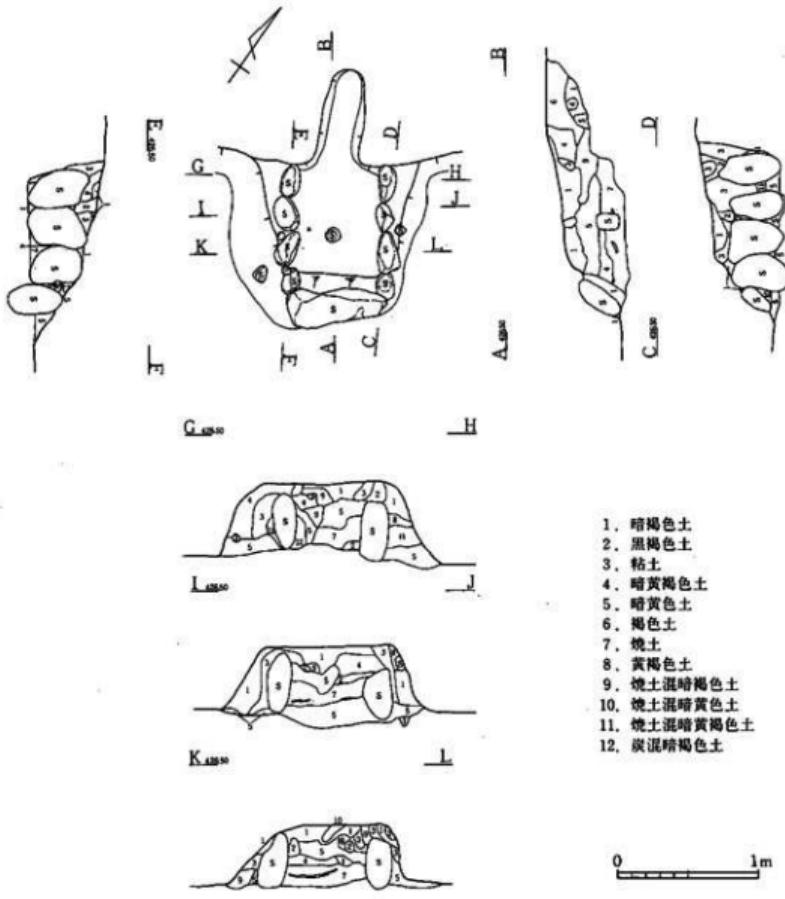
AV14グリッドを中心に検出した。掘立柱建物址3に切られる。6.6×6.6mの方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN32.5°Wを示す。覆土はほとんどが暗褐色土であり、壁際から床面上に暗黃褐色土がレンズ状に堆積しているのが認められた。壁高は50～65cmを測り、急な立ち上がりが良好な状態で確認された。周溝は壁直下にほぼ全周して検出され、深さ3～12cmを測る。幅10～25cmと一定せず、東壁側が幅広である。床面はきわめて堅く締まっている。主柱穴は4本確認され、不整円形を呈し径50～65cmを測る。深さは53～65cmでP1を除きほぼ一定している。南壁西側には115×95cm、深さ69cmのいわゆる貯蔵穴があり、第11図3・5の土師器壺はこの穴から出土した。周囲に土手状の縁部があり、西側から第13図2の須恵器壺が逆位で出土した。カマド左側の穴付近は遺物が集中出土した。穴内部より第11図6、第12図1・4・7が、また周囲より第12図6・第13図1が出土した。北壁中央に位置するカマドは原形をよくとどめており、石芯粘土カマドである。長さ約40cm、幅20～30cm、厚さ20cm程の扁平礎を立て並べ袖石とし、カマド前面の袖石は床面を掘り込んで掘えられていた。天井石はカマド前面にずり落ちて床面に接していた。内部は焼土が厚く発達しており、焼土を中心にも多数の遺物が出土した。第12図1～3等は焼土内から、8・10はカマド上部からの出土である。また北壁を幅30cm、奥行60cm掘り込んだ煙道が確認された。カマドの周囲には礎が散在し、右側からは土師器壺が出土し、左側に焼土



插図9 28号住居址

が認められた。

遺物は土師器壺・壺・高壺・瓶・須恵器壺・砥石等があり、出土量は多い。土師器壺（第11図1）は胴部半ばに最大径をもち、最大径に比して器高が小さい。内外面とも施ミガキが施されるが、内面は二次焼成を受け火はねが全体に及んでいる。2は口縁に最大径をもつ長胴の壺で、外面口縁部は横位、以下右下がり斜位の施ミガキが施される。胴部球形を呈する3は内面にクシ状工具痕をとどめている。5は外面下半および胴部内面に二次焼成による火はねが顯著に認められる。また内面下半に炭化物が付着する。6は胴下半が施ケズリ後施ナデされる等全体がナデ調整され、一部外面上半に炭化物が付着する。土師器壺はいずれも口唇が外半し、外面施ケズリ後ナデ、内面ミガキ調整を主体とする。第12図3は乱雑な暗文が施される。6は内外面施ナデが施されるが、内面底部付近に凹凸がある。7はほぼ完形の高壺で外面褐色を呈する。壺部はナデを主体とし、脚部外面施ミガキ内面施ケズリが施される。8は壺部内面に指おさえ痕をとどめる。9は二次焼成を受け外面橙褐色を呈し、内面底部に火はねが認められる。10は内面縁部に炭化物が付着する。第13図1は上半が二次焼成を受けて赤変し火はねがある。内外面施ミガキが施され、穿孔部はナデ調整される。把手が付くが、基部を残して欠損する。2は口唇および肩部に灰が溶着する。3は大形の罐で頸部はしほられて成形される。肩部に多量の砂が付着する。

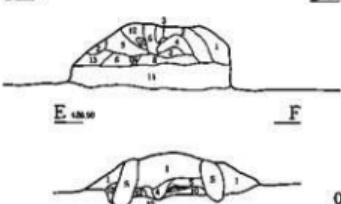
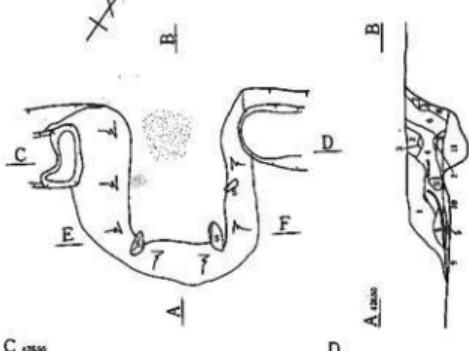
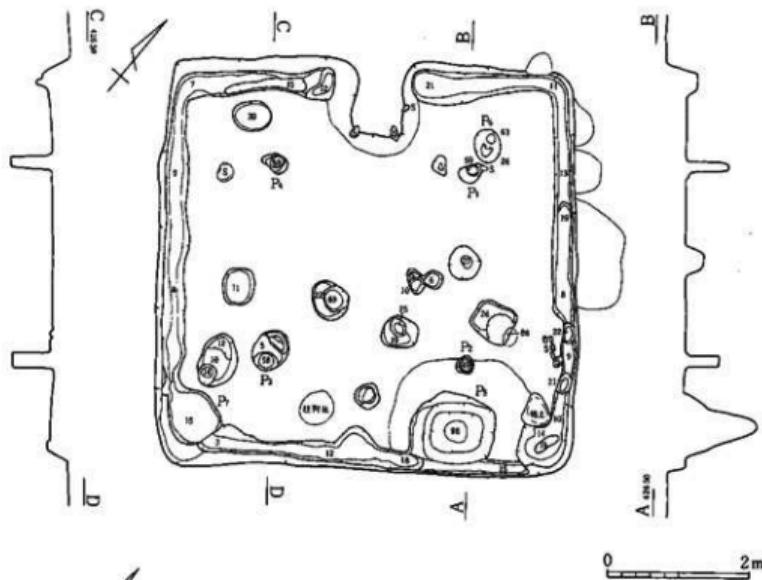


挿図10 28号住居址カマド

出土遺物から26号住居址と同時期の古墳時代後期に比定される。

#### ⑤29号住居址（挿図11、第14・15図）

AN19グリッドを中心に検出した。26号住居址の南西に位置する。東西5.9×南北5.6mの方形を呈する堅穴住居址で、主軸方向はN38.5°Wを示す。覆土はほとんどが暗褐色土である。壁高



- 1. 暗褐色土
- 2. 暗黄色土
- 3. 黑褐色土
- 4. 烧土、灰
- 5. 暗黄褐色土
- 6. 烧土、灰混暗褐色土
- 7. 烧土混褐色土
- 8. 黑色土
- 9. 烧土混暗黄褐色土
- 10. 烧土
- 11. 烧土、炭混暗黄褐色土
- 12. 暗黄色粘土
- 13. 褐色土
- 14. 漆黑土

插図11 29号住居址、カマド

は18~31cmを測り西壁側の傾斜はやや緩やかなものの全体的に急に立ちあがる。周溝は壁直下にほぼ全周して検出され、深さ7~21cmを測る。幅20~45cmと一定せず、底面の状態は凹凸がある。床面は堅く締まっており、北西側がやや低くなっている。主柱穴は4本確認され、掘り方は不整形であるが、柱痕はP3を除いてほぼ円形を呈し、径約20cmを測る。深さは49~59cmでP2が浅いものの他は一定している。南壁下の東寄りに110×80cm、深さ98cmの貯蔵穴と考えられる穴が掘り込まれており、周囲はマウンド状に盛り上がっていた。北壁中央に位置するカマドは比較的良好な状態で確認された。カマド前面に一対の内傾した袖石がある他は袖石を欠く。袖石周辺に粘土があり、石芯粘土カマドと考えられる。カマドの下位から周溝が検出され、カマド構築の手順および方法が知られる。支脚手前を中心に土師器壺・壺等が集中出土しており、カマド廃絶後転落したものと考えられる。本址南東隅には土師器壺（第14図8、第15図2~7・12）・鉢（14）・壺（16）、いわゆる織物石等が集中出土した。また40×50cm、厚さ12cm程の粘土が周溝脇に検出された。

遺物は土師器壺・壺・鉢・壺等があり、完形のものが多い。土師器壺（第14図1~4）は器形のバラエティーに富む。1は口縁に最大径があり、口径に比して器高が小さい。内外面ほぼ全体縦位の籠ミガキが施され、内面頭部から胴下半にかけてわずかに炭化物が付着する。2は胴部球形を呈すると思われ、口縁部がわずかに折り返される。このため頸部付近に顯著に皺が残る。3は長胴の壺と思われ、内外面ナデ調整され、内面に接合痕をとどめる。5は主に籠ナデ調整が施されるが、外面の3ヶ所に二次焼成による火はねがある。6は焼成不良な壺で底部は籠ケズリにより器面が荒れる。第15図1は内面に放射状の籠ミガキが施されており、底面には種不明であるが、種子痕がある。2は内外面橙褐色を呈する焼成不良の土器である。3は口唇端に籠によるオサエが残る。5は外面に黒斑があり、底部は籠ケズリにより一部光沢を帯びる。9の底部は肉厚で外面上半は黒色以下橙褐色を呈する。内外面に数ヶ所初痕が観察される。10はロクロ整形でなく、口縁部が著しく歪む。内面底部はひび割れる。13は輪積み成形され、内面に接合痕をとどめる。外面下半に黒斑がある。15は内面縦位、外面横位の籠ミガキが施され、内外面橙褐色を呈する。16は外面胴上半の一部に剥落がみられ、内外面籠ミガキされるものの接合痕をとどめる。底部内縁は籠ケズリが施される。

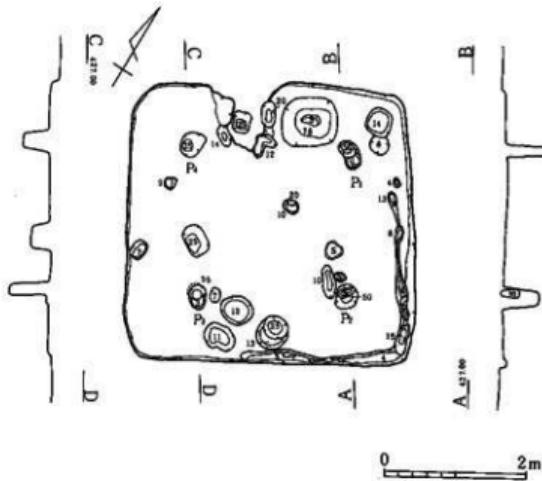
出土遺物等から他の住居址と同時期の古墳時代後期に比定される。

（馬場保之）

#### ⑥ 30号住居址（神図12、第16図）

調査範囲の北端に検出した。西隅を中心に上部は擾乱を受けている。全体が調査できた隅丸方形堅穴住居址である。規模は3.8×4.1mを測る。主軸方向はN31.5°Wを示す。覆土は黒色土である。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、確認できた壁高は4~12cmである。周溝は四隅からそれぞれの壁下の中央部までが検出された。北東中央部では壁直下からやや離れて内側に確認された。

床面は直上まで擾乱を受けているためあってか、凹凸があり、軟弱である。主柱穴は4本主柱穴である。直径25~40cm、深さは西隅の穴を除いて55cmを測るものである。また、西と東の穴は歪み、北と南の穴は、同じ覆土の浅い同規模の穴を伴っており、柱の抜き取りを行なっている可能性がある。ほかに、住居址内にいくつかの穴を確認したが、本址に付属するもの



挿図12 30号住居址

であるかの把握はできなかった。カマドは北西壁の中央からやや左寄りに設けられている。残存状態がきわめて悪いが、石を抜き取ったと思われる痕跡があり、石芯粘土カマドであったと考えられる。

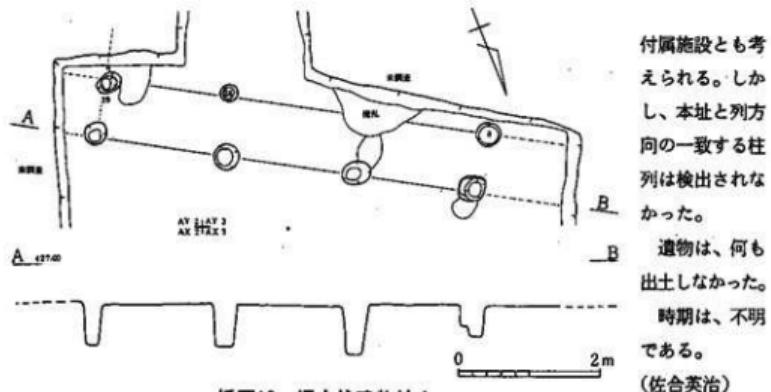
出土遺物は、きわめて少ない。図化できるものは土師器の壺(第16図1)一点のみである。内面に暗紋を付した、器高の低いものである。

時期は古墳時代後期に位置づけられる。

## 2) 挖立柱建物址

### ① 挖立柱建物址1(挿図13)

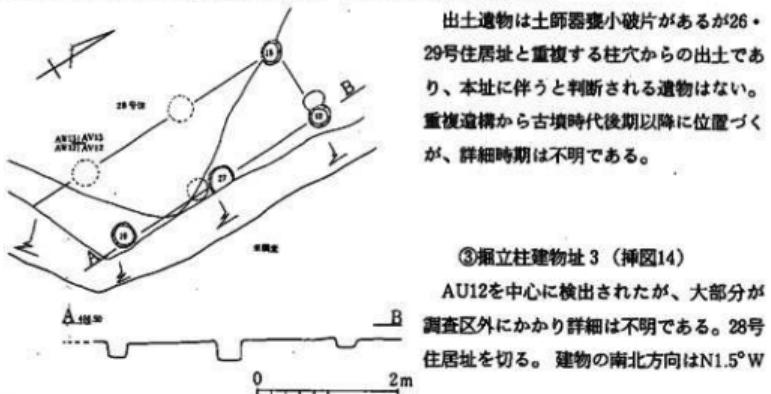
南東トレンチの調査で確認した竪穴精査のため拡張した南端に、多数の穴と共に確認された。南西側は用地外となる。全体の規模は一辺が5.5m以上ある縦柱の掘立柱建物址と考えられるだけで、詳細は不明である。この一辺を仮の桁方向とすると軸方向はN51°Wを示す。確認できた仮の桁の柱間は3間で1.75m、仮の梁側は1間、80cmを測る。柱掘り方の平面形は円形のものと、やや四角なものとがあるが、掘り方の規模は35cm前後である。壁面は垂直に近い。深さは北東側の列が深く46~60cmを測り、内側と思われる列は8~39cmで浅いものがある。穴の深さ、覆土から建物址と判断したが、柱列址3・4と同形態であることから柱列址の一部または、なんらかの



挿図13 振立柱建物址 1

②振立柱建物址 2 (付図 1)

AJ18を中心には検出され、一部調査区外にかかり未調査である。26・29号住居址を切る。桁行9間、梁行2間の身舎の東・西・北面に廊のついた10間×4間の建物址である。桁行25.0m、梁行7.1m、桁行方向はN8.0° Eを示す。柱間は桁行で北から1.35m・2.80m・2.80m・2.60m・2.90m・2.60m・2.85m・2.50m・2.45m・2.25mを測り、身舎部分の平均は2.63mである。梁行方向は西から1.40m・2.95m・2.75m・1.40mを測る。柱穴の径は25~50cmとばらばらであり、平面形も円形が大半であるが、不整形のものもある。柱穴の深さは一定しないが、底部レベルの多くは426.00mに集中する。柱列址4に直交する桁行方向をとることから柱列址4と一体の造構であると考えられるが、柱間の数値を異にするため三面廊の建物とした。



挿図14 振立柱建物址 3

③振立柱建物址 3 (挿図14)

AU12を中心には検出されたが、大部分が  
調査区外にかかり詳細は不明である。28号  
住居址を切る。建物の南北方向はN1.5° W

を示す。柱間は南北方向1.6m、東西方向1.1mであり、深さは描わないものの径30cm程度の柱穴である。柱列址の可能性もあるが、調査された範囲で本址に連続すると思われる遺構は確認されず、掘立柱建物と判断した。

出土遺物はなく詳細時期は不明であるが、重複関係から古墳時代後期以降に位置づけられる。

### 3) 柱列址

#### ①柱列址3(付図1)

AF4を中心に検出された。土坑12を切り、柱列址4と接する。主軸方向はN81.5°Wを示し、柱列址4の北行する辺にはほぼ直交する。東西方行5間を確認し、柱間は東西方向各々2.15m、南北方向1.25mを測る。柱穴は径約50cmの平面不整円形を呈し、底部のレベルも426.00m付近に集中する。柱列址4と接する部分では柱穴の位置がずれ、柱間の数値も異にするため柱列址4と区別した。不連続であるとはいえ、その位置関係、柱穴の形状・深さ等から本址と柱列址4とは時期や性格等密接な関連をもつものと思われる。

本址に伴う遺物は土師器壺小片のみで詳細時期は不明であるが、掘立柱建物址2・柱列址4と同時期の古墳時代後期以降に位置づく。

#### ②柱列址4(付図1)

AF13を中心に検出された。掘立柱建物址2と連続し、柱列址3と接する。東西方向9間、南北方向3間の鉤の手状を呈する。北行する辺の方向はN8.5°Wを示し、西行する辺の方向はN81.5°Wを示す。東西方向西から第1間から第8間までの柱間は平均2.10m、南北方向の柱間は2.15mを測り、並行する柱穴間隔は1.50mである。柱穴は径30~50cmの不整円形を呈し、底部のレベルは柱列址3と同様426.00m付近に集中する。

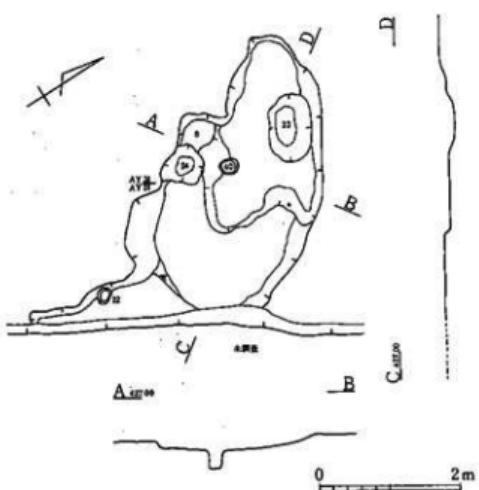
本址に伴う遺物はなく詳細時期は不明であるが、掘立柱建物址2・柱列址3と同時期の古墳時代後期以降に位置づく。

(馬場保之)

### 4) 積穴

#### ①積穴1(挿図15、第16図)

用地内南東のトレンチ調査部分にかかるて検出され、一部拡張して調査した。南東側は用地外



挿図15 壁穴1

にかかる。また、本址の南側に本址と同様の覆土の落ち込みを2.1m確認し、同時に掘り下げた。用地外にほとんどかかるため確実ではないが、別造構の可能性が高い。この部分からは土器の出土は無く、性格、時期等は不明である。壁穴の規模は4×2.2mを測る。北西、南東方向に長く草履状の平面形で、南西側はかなり歪んでいる。覆土は漆黒色土の一層である。壁高は5~11cmを測り、壁面はきわめて緩い傾斜である。底部には凹凸があり、南から北へ11cm傾斜している。穴状になる部分も確認したが、関連は把握できず、本址の性格も不明である。

遺物は、少ない。図化できるものは土師器壺（第16図2）のみである。ほかに、流れ込みと思われる縄文土器片がある。壺は最大径が胴部下半にあるもので、口縁部は頸部から強く外反している。

時期は、出土遺物が少ないが、古墳時代後期に位置づくと考えられる。

## 5) 集石

### ①集石1（挿図16、第16・17・18図）

25号住居址掘り下げ中に確認した。東側は用地外にかかっている。掘り方の規模、深さ等は土層の断面調査によても確認できなかった。石の認められる範囲は東西に長く、1.8×1.2mを測る。石はすべて自然石で径45~15cmのものが使われている。西側の石の下には、堅く締まった焼土が円形に厚さ5cm程堆積していた。火葬墓と把握したが、25号住居址の土層観察によって確認した火葬の住居址のほぼ中央部にあたり、やや疑問が残る。

遺物の出土は、きわめて多く、石の外側や下部からの出土もあるため、先に述べた25号住居址を切る住居址の遺物と考えられる。土師器には壺（第16図3~7、第17図1~10、第18図1~5）、壺（第18図6）がある。壺は皆長胴となるもので、カキメ成形されている。第16図3~7の口縁

部は内側も横のカキメ痕が認められ、胸部のカキメの中には細かなクシ状工具が使われている第17図5・6もある。また、第18図4・5の底部には葉脈痕をとどめている。

壺はロクロ成形で、内面黒色処理されている。須恵器には蓋(7~9)、壺(10~15)、高壺(16)がある。蓋は皆やや甲高で、8は口縁部が強く外反する。壺には10~14の高台の付かないものと15の付くものがあり、前者の底部10~12には糸引き痕が認められる。ほかに、石器として砂岩の砥石(17)がある。

時期は、確実に本址の遺物となるものが不明のため、切り合い関係から、平安時代以降と把握できるだけである。

(佐合 英治)

## 6) 土坑

### ①土坑12(挿図17)

AE3で検出された不整形の土坑である。柱列址3に切られる。埋土は黒色土であるが、西側の張り出し部分はやや褐色がある。底部の状態は幾つかの平坦部がレベル差をもっており、複数造構の重複する可能性もある。

出土遺物はなく、時期不明である。

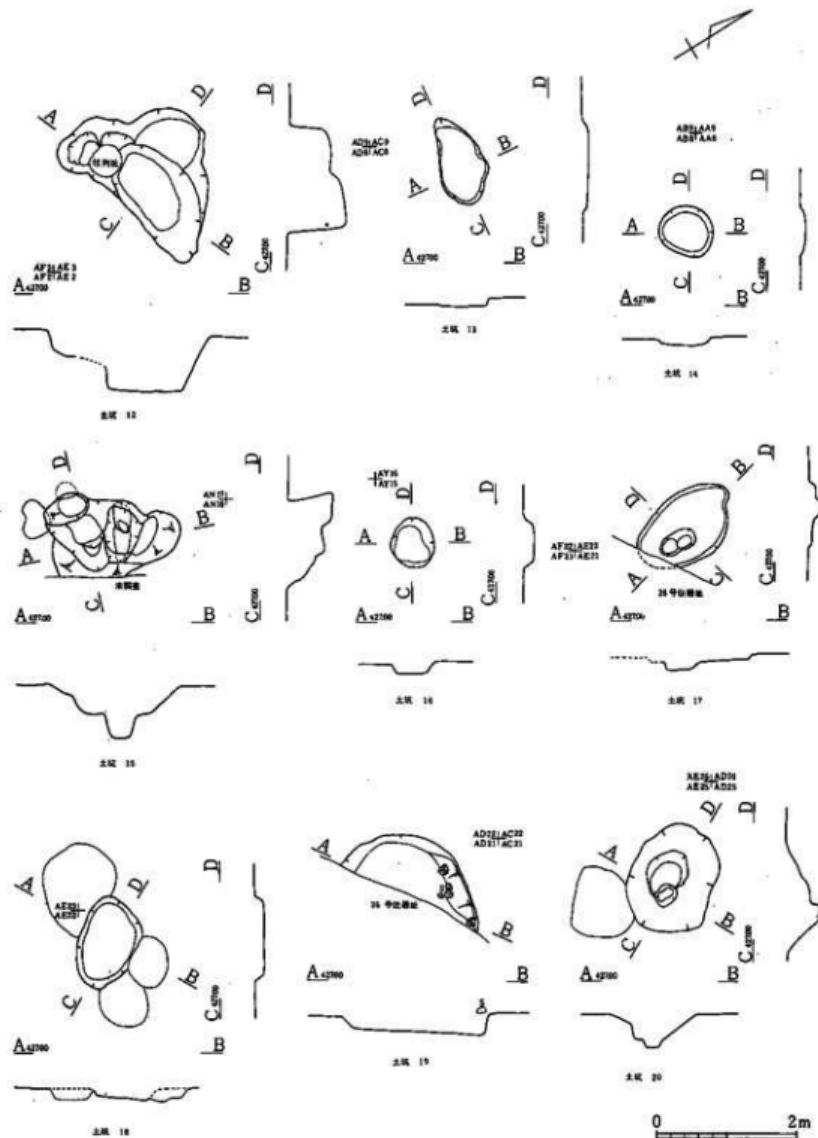
### ②土坑13(挿図17・第19図1)

AC9で検出された埋土褐色土の不整形の土坑である。底部は平坦で、上部がほとんどとばされたため、壁の確認された部分の立ち上がりはゆるやかである。

出土遺物は硬砂岩製の横刃型石器(第19図1)のみで、縄文時代中期に属することのほか、詳細時期は不明である。



挿図16 集石1



插図17 土坑12~20

### ③土坑14（挿図17）

AA8・AB8で検出された75×70cmの不整椭円形を呈する土坑で底部は皿状にくぼむ。埋土は暗褐色を呈する。

出土遺物はなく、時期は不明である。

### ④土坑15（挿図17）

AN16・AO16で検出された、一部未調査の不整形の土坑である。壁はだらだらと落ち、底部はレベル差をもつ。埋土は暗褐色を呈する。平面形および底部の状態から複数造構の重複する可能性がある。

出土遺物はなく、時期は不明である。

### ⑤土坑16（挿図17、第19図2）

AY15で検出された、70×60cmの不整椭円形を呈する土坑である。底部は平坦であるが、不整形で北壁側がゆるやかに立ち上がる。埋土は褐色を呈する。本址からは打製石斧（第19図2）が出土している。硬砂岩製で両側縁に漬しが施され、背面側に顯著な擦痕が観察される。

詳細時期は不明である。

### ⑥土坑17（挿図17、第19図3・4）

AE22を中心に検出された、(150)×100cmの北側に張り出しをもった不整形を呈する土坑である。26号住居址に切られる。内部は一段掘りくぼめられており、全体的に西側に低くなっている。埋土は暗褐色を呈する。本址からは縄文時代中期の深鉢片（第19図3）および打製石斧（4）が出土している。4は硬砂岩製で両側縁に漬しが施され、刃部を欠損する。

出土遺物から縄文時代中期後葉に比定される。

### ⑦土坑18（挿図17、第19図5）

AD22を中心に検出された、130×80cmの不整椭円形を呈する土坑である。他の柱穴と重複するが、新旧関係は不明である。ゆるやかに掘りくぼめられており、全体的に東側に低くなっている。埋土は暗褐色を呈する。本址からは硬砂岩製の打製石器（第19図5）が出土している。

出土遺物が少なく詳細時期は不明である。

### ⑥土坑19（挿図17、第19図6・7）

AD21を中心に検出され、26号住居址に切られ、全体形・規模等不明である。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、北東壁側はだらだらと落ち込む。北東壁寄り底部から25cm程浮いた状態で小礫が検出された。底部は東側に低くなっている。埋土は暗褐色を呈する。本址からは硬砂岩製の打製石斧（第19図6）、砥石（7）が出土した。打製石斧は粗い剥離により成形される。砥石は緑泥岩製で節理面を大きく残す。

出土遺物は石器のみで、本址の詳細時期は不明である。

### ⑦土坑20（挿図17）

AE25で検出され、他の柱穴と重複する。155×115cmの不整橢円形を呈する土坑である。ゆるやかに掘りくぼめられており、内部はさらに二段に掘り込まれている。埋土暗褐色土である。

出土遺物はなく、本址の詳細時期は不明である。

### 7) 柱穴(挿図18～27)

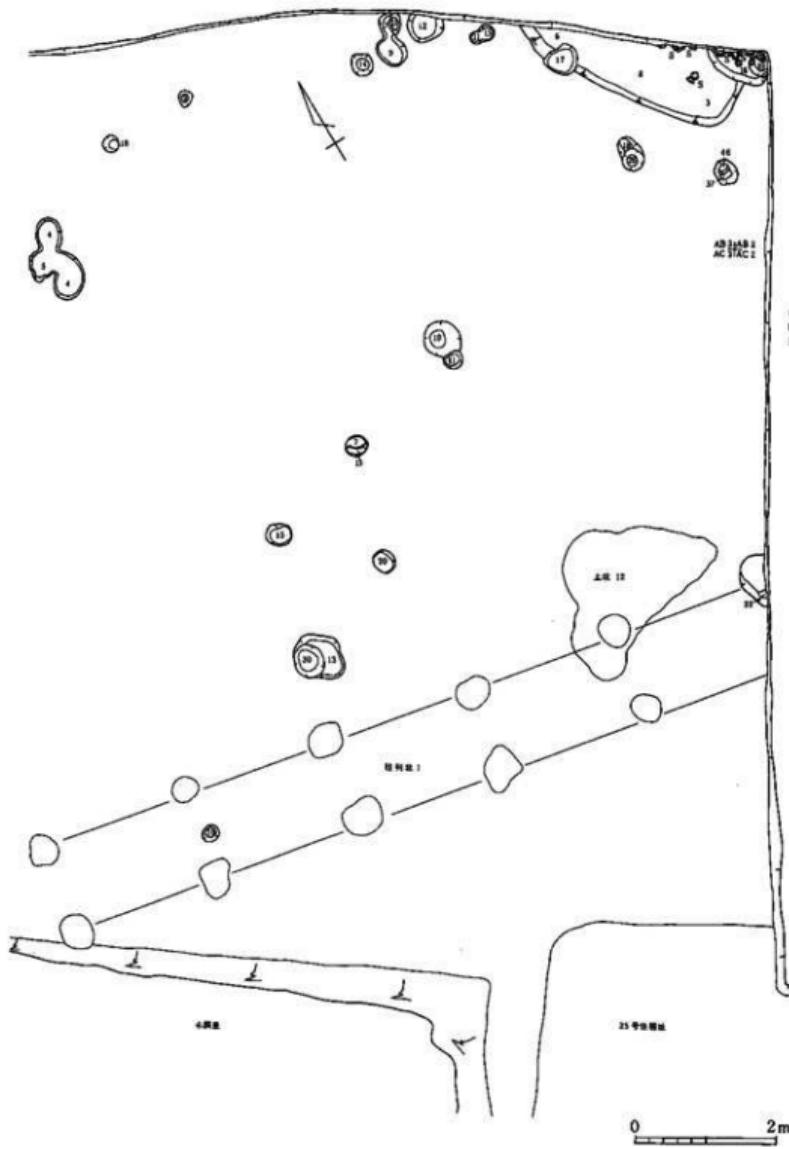
このほか、調査区のほぼ全面に亘って多数の柱穴が検出されている。26・29号柱居址西側および27号柱居址周辺の規模の大きいものは埋土が土坑に類似する。そのほとんどが確認面から底部までのレベル差が小さく、壁はゆるやかな立ち上がりを示す。径の小さいものは多くが埋土漆黒土・黒色土で、壁は急に立ち上がる。いずれも出土遺物がなく、時期不明である。

### 8) その他

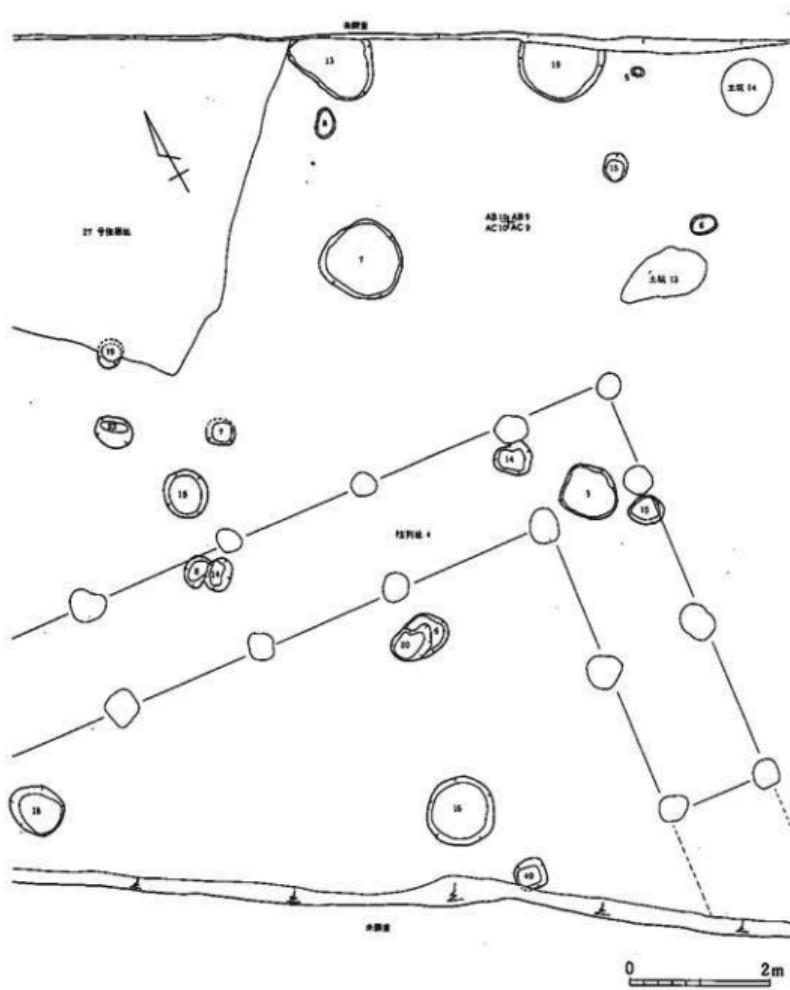
#### ①造構外出土遺物（第19図8～第24図4）

今次発掘調査の結果、造構外から若干の土器片と多数の石器類が出土した。第19図8～12は縄文時代中期の深鉢片で、12は結節繩文が施文される。13～15は土師器片で、13は甕底部、14は高壺脚部、15は盤である。16は灰釉皿で、高台部にナデの際の工具痕をとどめる。17は鉄軸がかかる。第20図1～第21図12は打製石斧を一括した。第20図2～6、第21図1・2・4は刃部に掠痕が認められ、第20図6・第21図2は掠痕の範囲が広範囲におよんでいる。第20図4・6は右側縁の渋しが顯著である。石材は硬砂岩（2・3・10・11、第21図1・5・7・9・12）、緑泥岩（第20図6、第21図2・4）である。13・14は半磨製の石斧でいずれも刃部を欠損する。第23図1は横刃型石器、2～11は横刃の剥片石器で、3・5は硬砂岩製、6・9は緑泥岩製である。第24図4は全面に朱彩された小礫である。

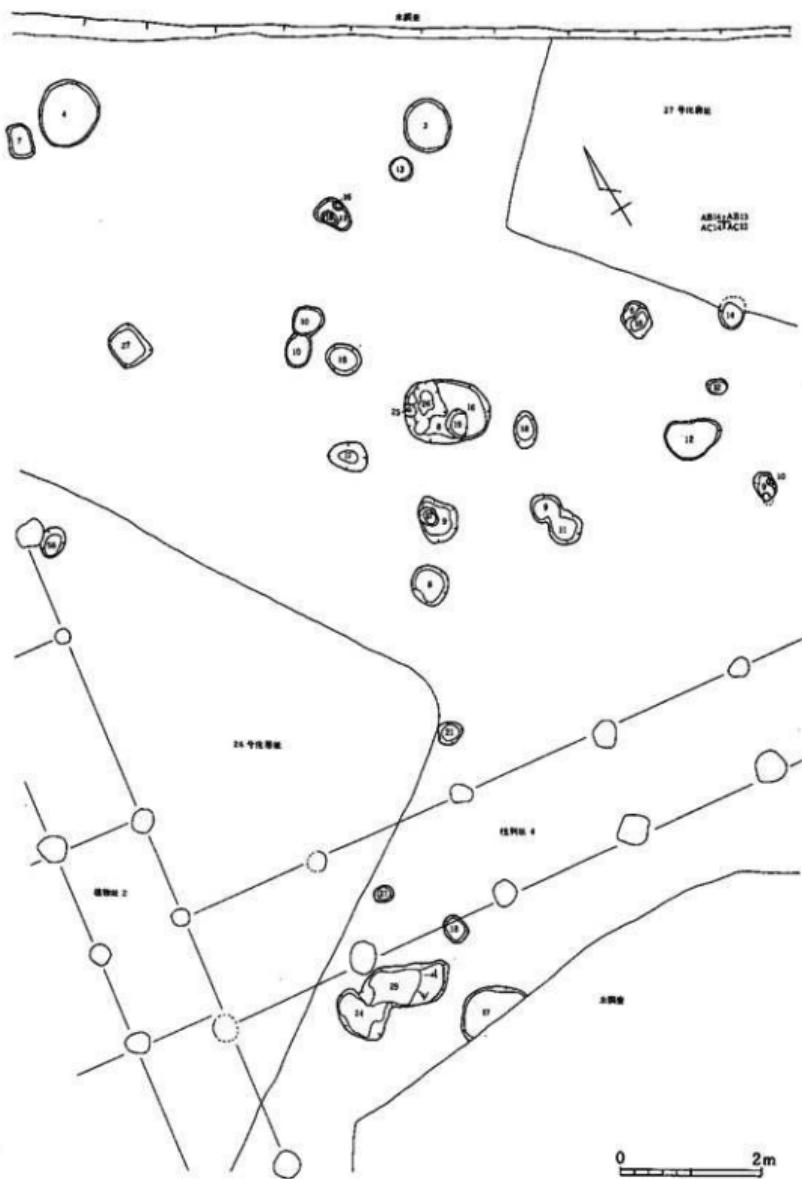
（馬場保之）

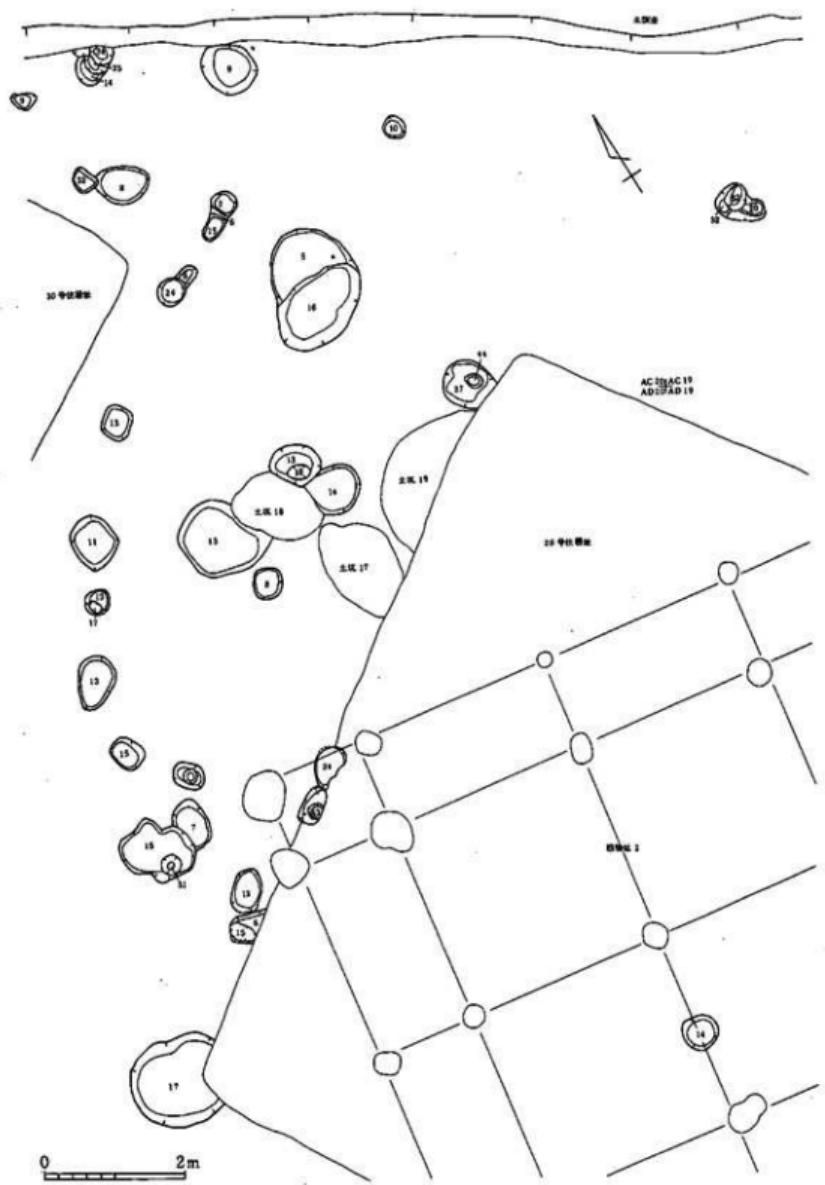


挿図18 柱穴平面図(1)



挿図19 柱穴平面図(2)





挿図21 柱穴平面図(4)

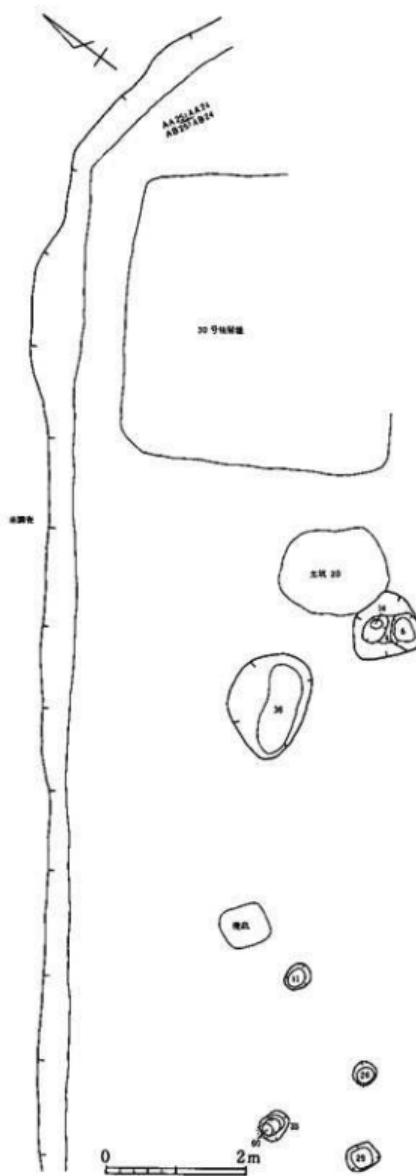
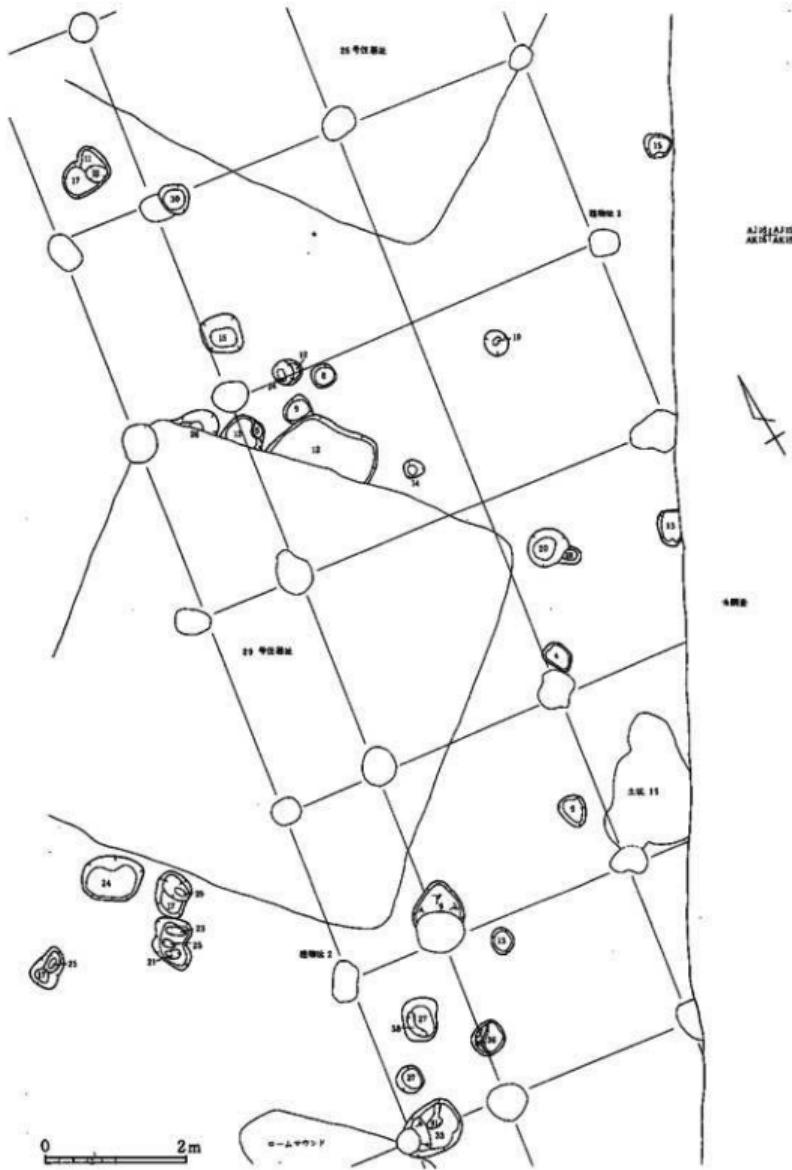
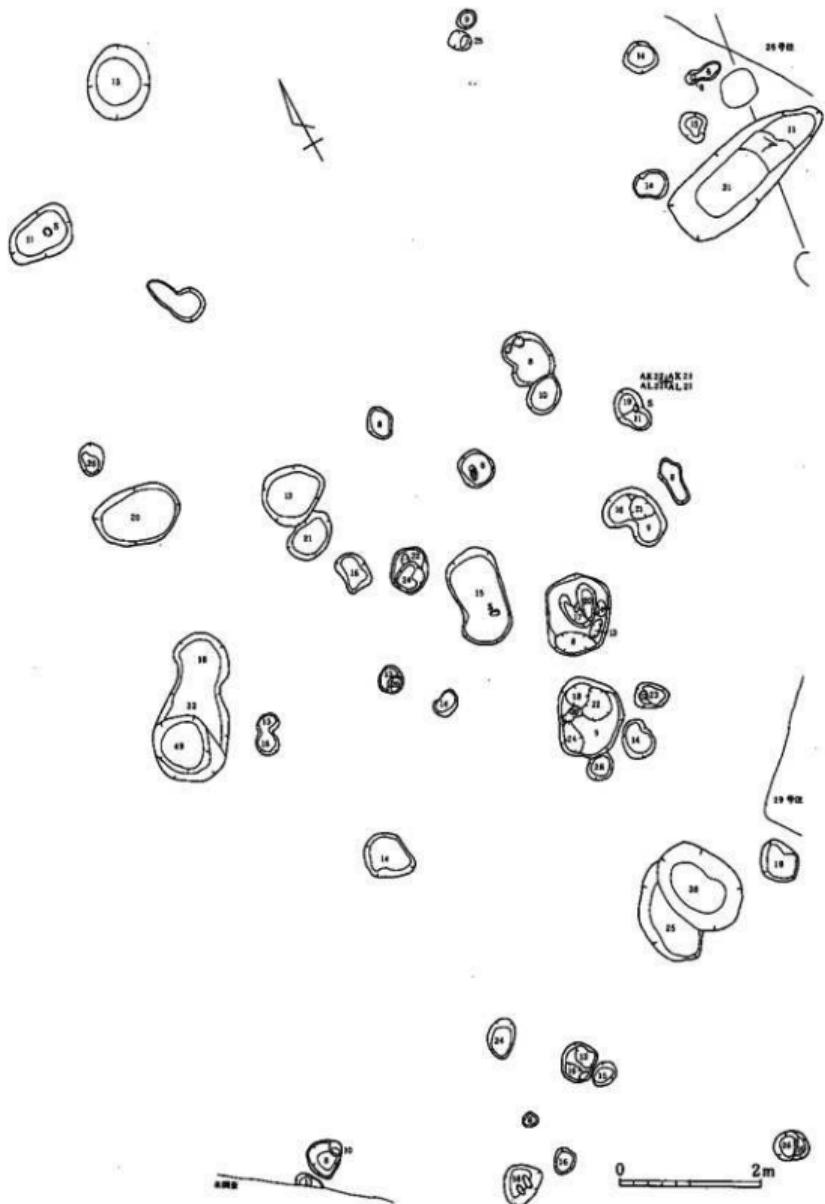


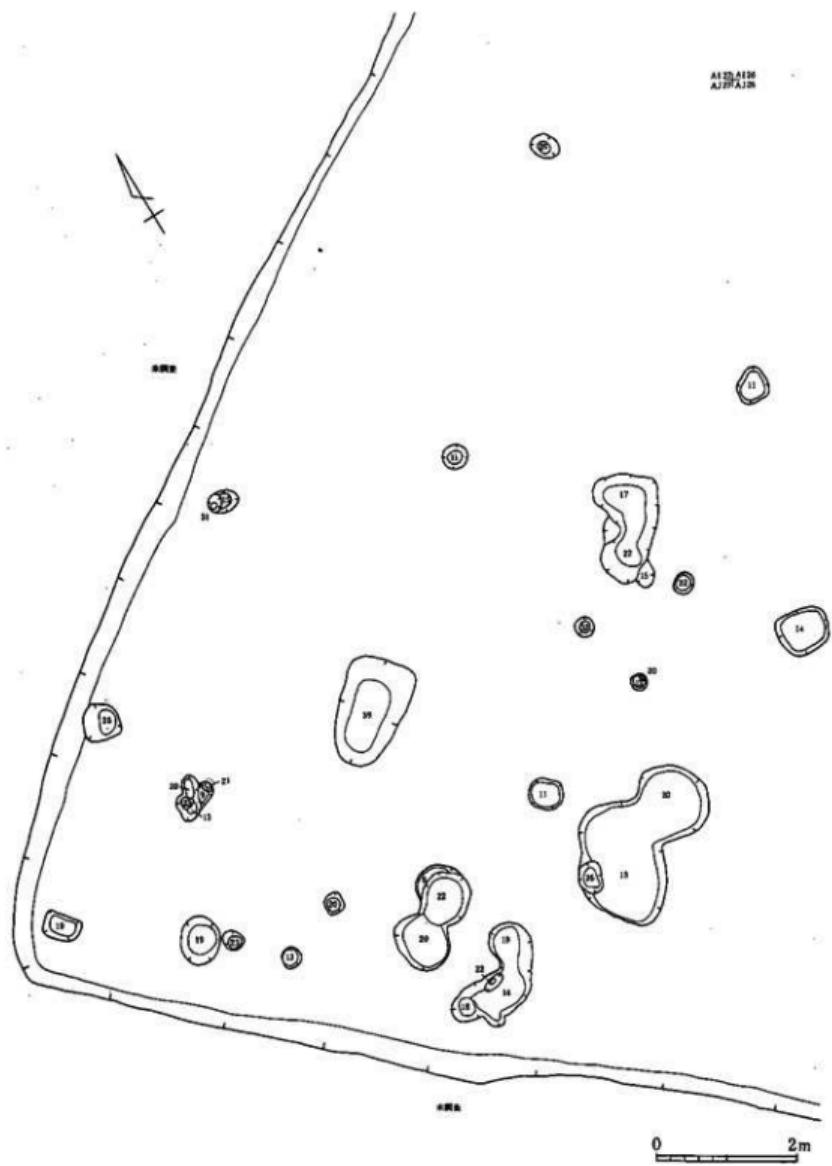
插圖22 柱穴平面圖(5)



挿図23 柱穴平面図(6)



挿図24 柱穴平面図(7)



挿図25 柱穴平面図(8)

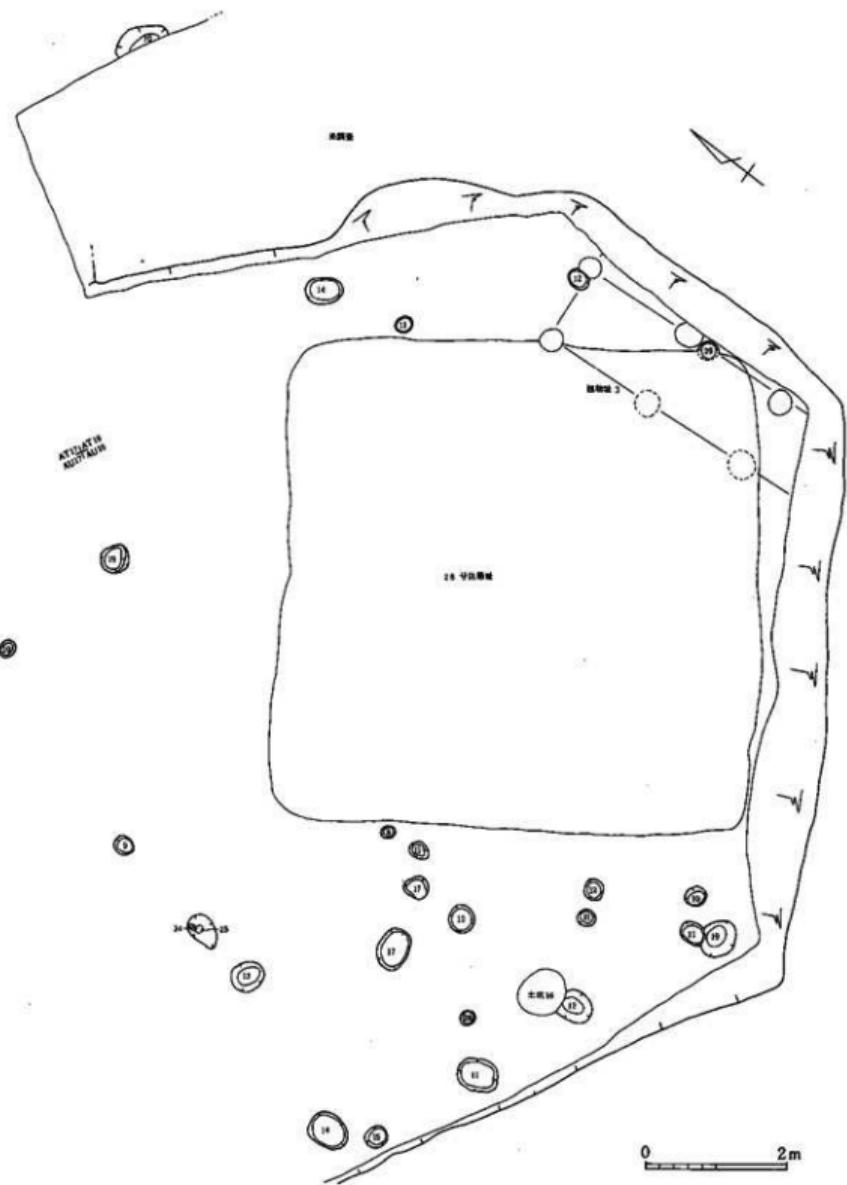
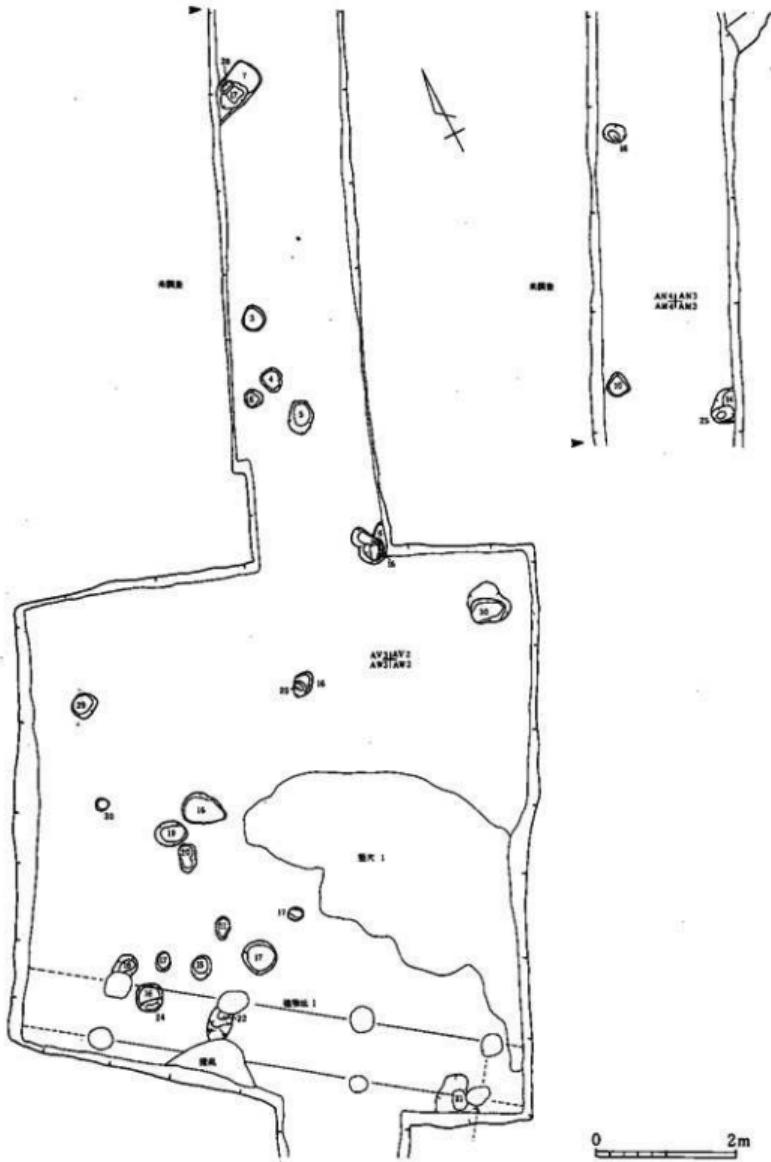


插圖26 柱穴平面圖(9)



挿図27 柱穴平面図(1)

#### IV まとめ

前の原遺跡については、かつて昭和45・49年に発掘調査が実施され、縄文時代中期・古墳時代における、かなり大規模な集落が存在することが指摘されていた。

そうした状況下で、今回の竪穴保育園建設に関して、緊急発掘調査を実施したわけであるが、調査範囲は、本文中に示したとおり、ごくわずかなものであり、遺跡の全容を理解するに不十分であることはいうまでもないが、今回の調査等に予想された何点かについて、具体的に証明することができたとともに、新しい問題点のいくつかも生じてきた。それらのいくつかを示して、本調査に関するまとめとしたい。

まず、縄文時代中期の集落について若干の考察を加える。前回の調査地点においては、その調査面積3,000m<sup>2</sup>弱において15軒の竪穴住居址が集中して確認された。それから予想されたのは、周囲一帯に同様の状態で、相当数の竪穴住居址が存在することであったが、その予想に反し、今回の調査地点は100m<sup>2</sup>弱西方に隔てたのみであるにもかかわらず、該期住居址は一軒も確認できず、該期の可能性のある土坑すらわずかに確認できたのみであった。

この結果から、集落の具体的な姿を考えるに至らないことはいうまでもないが、当前の原の台地全面が居住域ではなかったことは示してくれる。

さらに推測の域は出ないが、該期集落は、前回調査地点の北側及び東側に展開したもので、台地全体でいえば東側の段丘崖下寄りに集落は形成されており、そうすることが当時の生活の中で、必然的に行われていたと考えられる。そうした状況が何故にあるのかは、遺跡全体の状況を把握しない限り解明の途はないといえるが、前回調査地点の隣接地が重要な意味を持つといえ、今後の諸調査に課されたものであるが、前回の調査で示された結果は当地域を代表する縄文時代中期の集落址としても過言ではない。つまり当前の原遺跡の具体的な内容の解明がなされることにより、当地域の縄文時代中期の様相を知ることができるといえる。

次に、古墳時代後期の集落については、前回の調査結果に基づく大規模集落の存在を強く裏付ける結果となった。前回調査で点在して確認された7軒の竪穴住居址に加え、今回5軒の竪穴住居址を確認調査した。前述の縄文時代中期の住居址の在り方とは対象的に、広範囲にわたって集落が展開したといえる。遺跡全体の面積と2回にわたる調査面積を比較したとき、全体の住居数は、優に100軒を越す大集落であったと判断される。

なお、前回調査で指摘されていた、隣接地に所在する兼清塚・丸山・大塚の諸前方後円墳との関連について、今次調査において具体的に示すまでの結果は得られなかつたが、その可能性のあることは否定するものではない。しかし、現在は消滅してしまつてはいるものの、同一台地上、

更には集落の一画内ともいえる位置に、かつて存在した古墳も多く有り、むしろ、それらとの関連が強い集落とすることが、より妥当ともいえる。そのことは、今次調査地点の西方100m程の位置から西方にかなり広範囲の湿地帯の存在が確認されており、また、その湿地から連続して深さ20m程の浸食谷もあり、前述3古墳と本遺跡との直接的な関連を求めるには、消極的にならざるを得ない。

なお、本遺跡に構成された該期集落の生産基盤として、その湿地帯は第1にあげられるもので、その湿地帯の位置からして、今回調査地点は、集落の西端に近いといえる。

次に、古墳時代の堅穴住居址等個々に関しても、いくつかの特筆事項がある。その第一は、26号住居址の規模についてであるが、一辺が11mの堅穴住居址は、当地方における該期最大の住居ということができる。堅穴掘り口内ののみの面積を見ても、121坪すなわち30数坪の家ということになり、更に上屋を考え堅穴掘り室外に1m程度の家屋内部の存在を加えれば、軽く40坪を越える特大の家であったといえる。出土遺物等については、他の一般的な住居址との差異は認め難く、居住の為の家屋である可能性が強いが、この大きさゆえに居住者の性格が大きな問題となる。また、その大きさこそ一般住居とは異なった性格を考えるべきものかもしれません、今後類例等を検討の上、性格等の特定に努める必要があるといえ、いずれにしても単独の遺構としては、大いに注目されるものといえる。

また、これらの住居について時代決定の材料ともいえる出土遺物についても、若干の興味ある資料がみられる。出土遺物の主体は、様々な器種の土師器であるが、それに混在してわずかではあるが、須恵器の断片的な資料がみられる。いずれも破片ではあるが、優品であり、罐・器台などがある。このうち器台は、かなり精緻なもので、その胎土等から初期の東山古窯産である可能性が強い。いずれにしても、これらの須恵器は、当地方への初期須恵器流入期のものといえ、新しい文化を受け入れた集落の姿を見ることができる。

次に、時代の特定ができないのは残念であるが、今次調査の結果中最大の特徴ともいえる、2本の柱穴が矩状に連続する柱穴列の存在である。

その形状から判断すれば、何等かの周囲に設けられた区画施設として考えられ、それも2本の柱の連続する状況から、かなりしっかりした施設であり、かつてそれが存立した姿を思い浮かべた時、他を圧するものであったと考えられる。本柱穴列を区画施設として考えたとき、それに開まれた中心となるべき部分が今回の調査地の北側にあたるか、南側にあたるのかは判断困難な現状といえる。また、時代的には、前述のとおり不明といわざるを得ないわけであるが、古墳時代住居址より、新しいものであり、この柱穴列の両側に古墳時代の住居址があることからも、古墳時代の施設とは考えられない。また、前回、及び今回の調査により、平安時代の住居址が確認されており、この時代に属することも考えられるが、それを直接的に証明することも困難である。いずれにしても調査結果から時代の特定が出来ないことは前述のとおりであり、今後の周辺部の

調査によって判断する以外にないといえる。

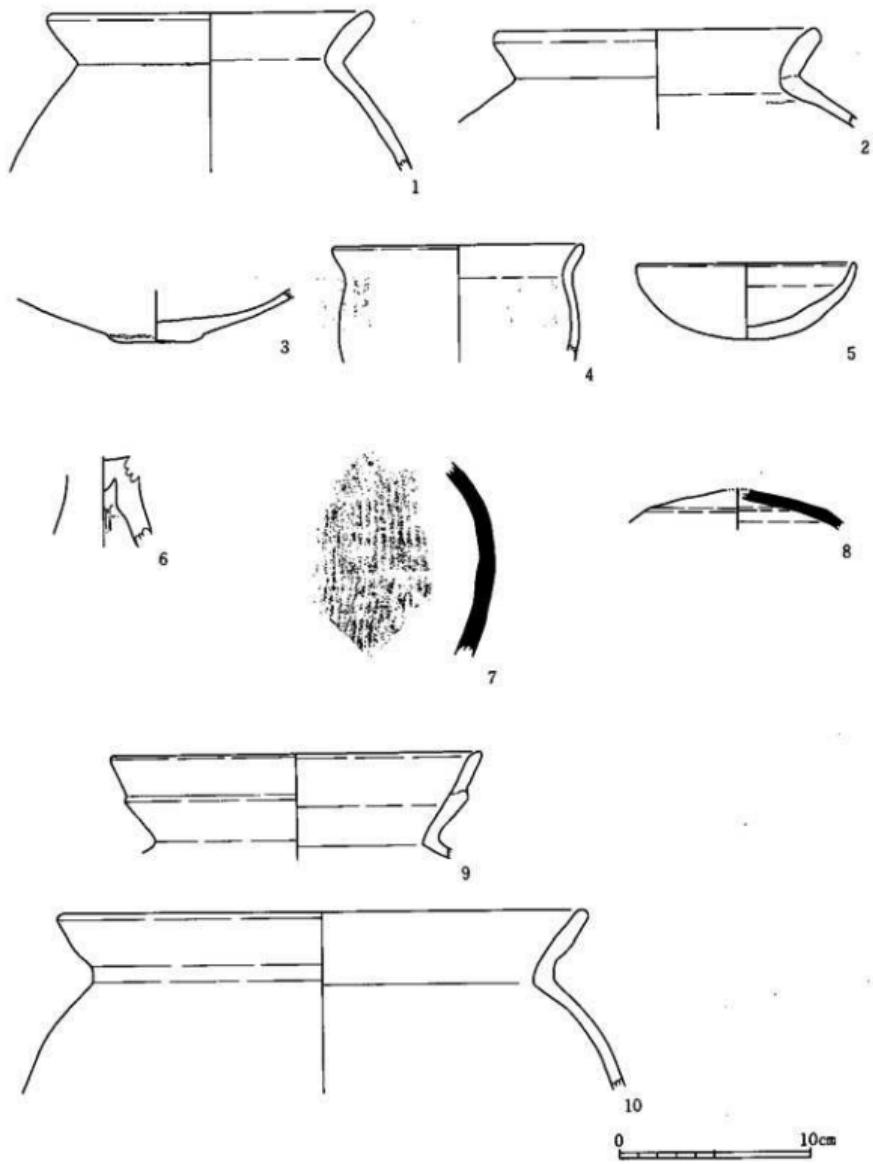
以上、調査結果に基づく幾つかの事実、及び問題点の整理を行なったが、遺跡そのものの有する重要性の一部が指摘できたのみといえ、これ以外にもより重要な意味が本遺跡については内包されている可能性が高く、今後の周辺部開発等には、慎重な対応が必要なことを記し、本書のまとめとしたい。

(小林 正春)

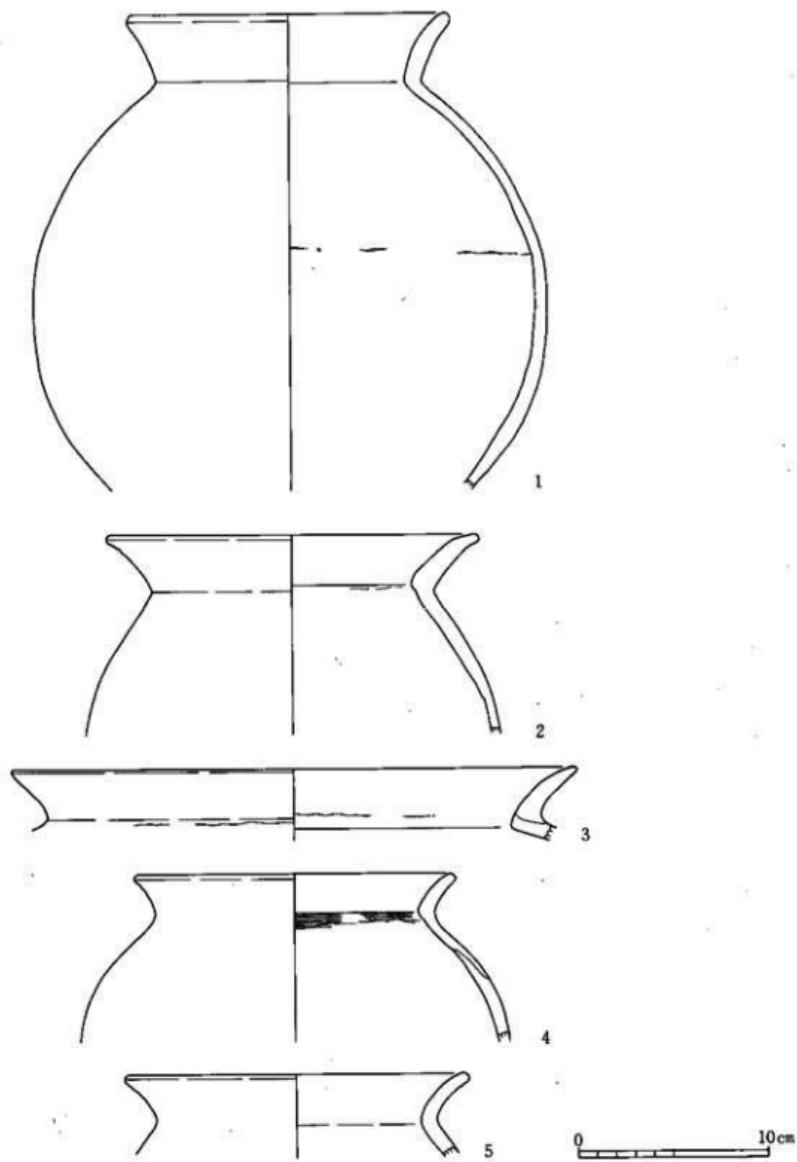
#### 参考文献

- 下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史』2・3巻  
飯田市教育委員会 1967『鏡塚発掘調査報告書』  
竜丘村誌編纂委員会 1968『竜丘村誌』  
飯田市教育委員会 1968『内山・花の木発掘調査報告書』  
" 1974『小池・宮城・神送塚』  
" 1974『開善寺境内遺跡』  
" 1975『前の原・塙原』  
" 1976『駄科北平遺跡』

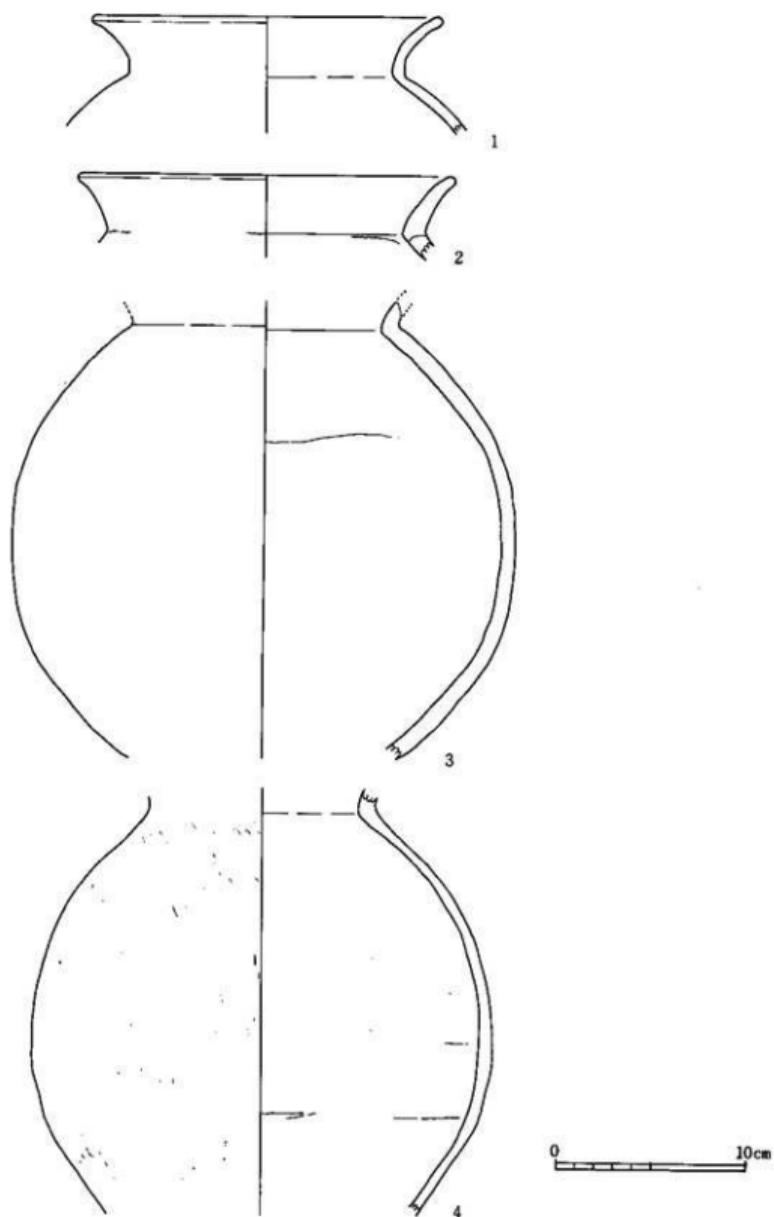
# 図 版



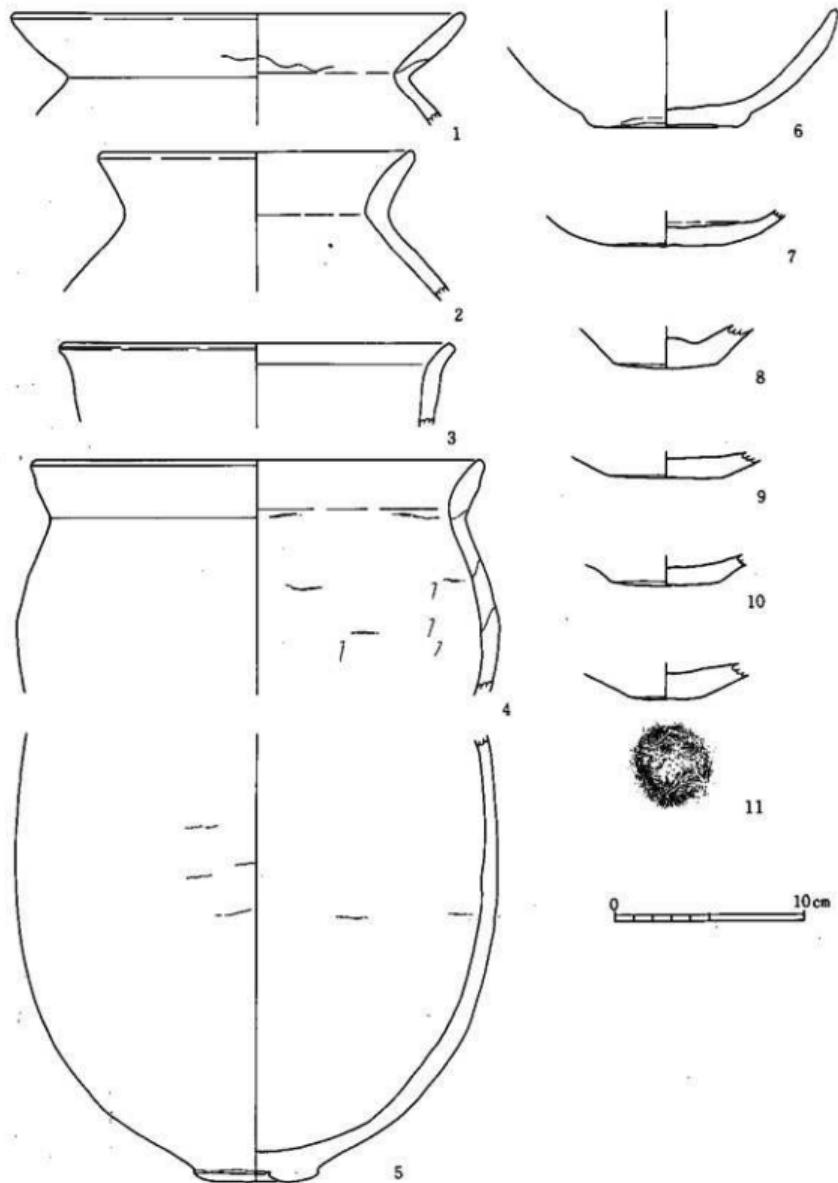
第1図 25・26号住居址出土土器(1~8 25住、9・10 26住)



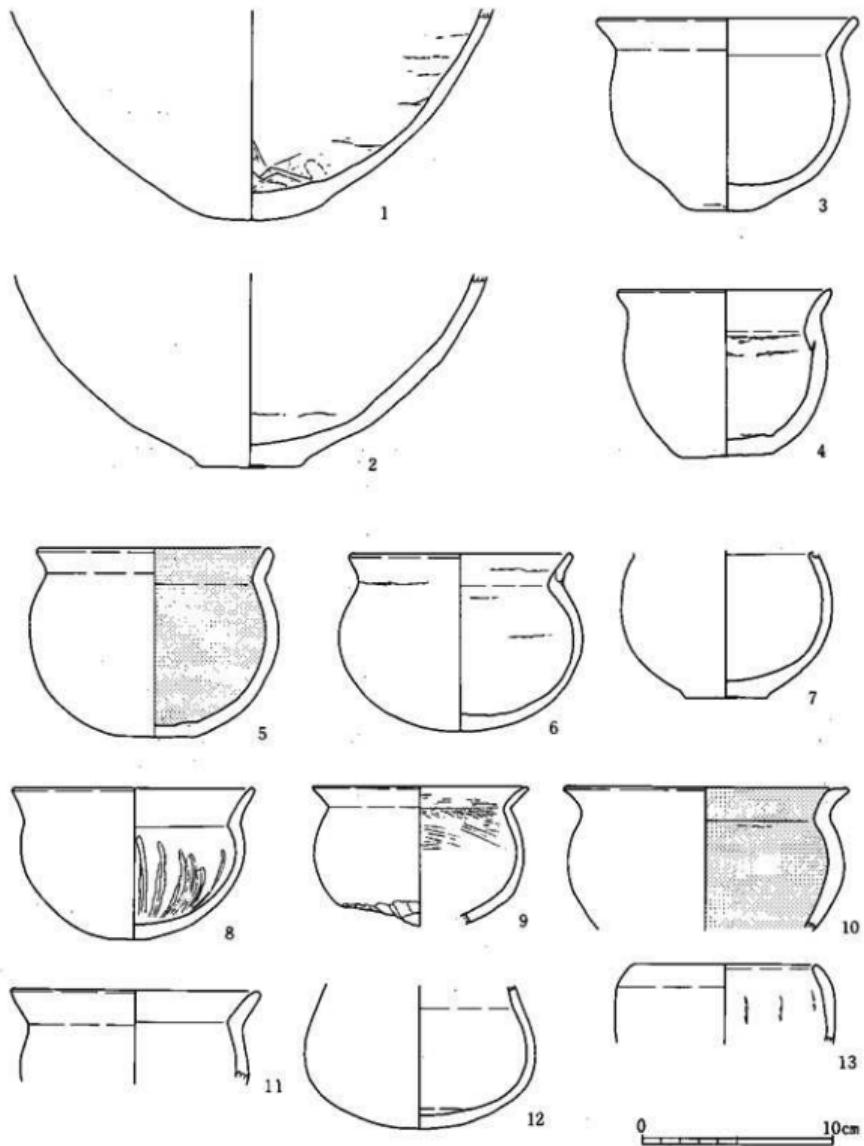
第2図 26号住居址出土土器



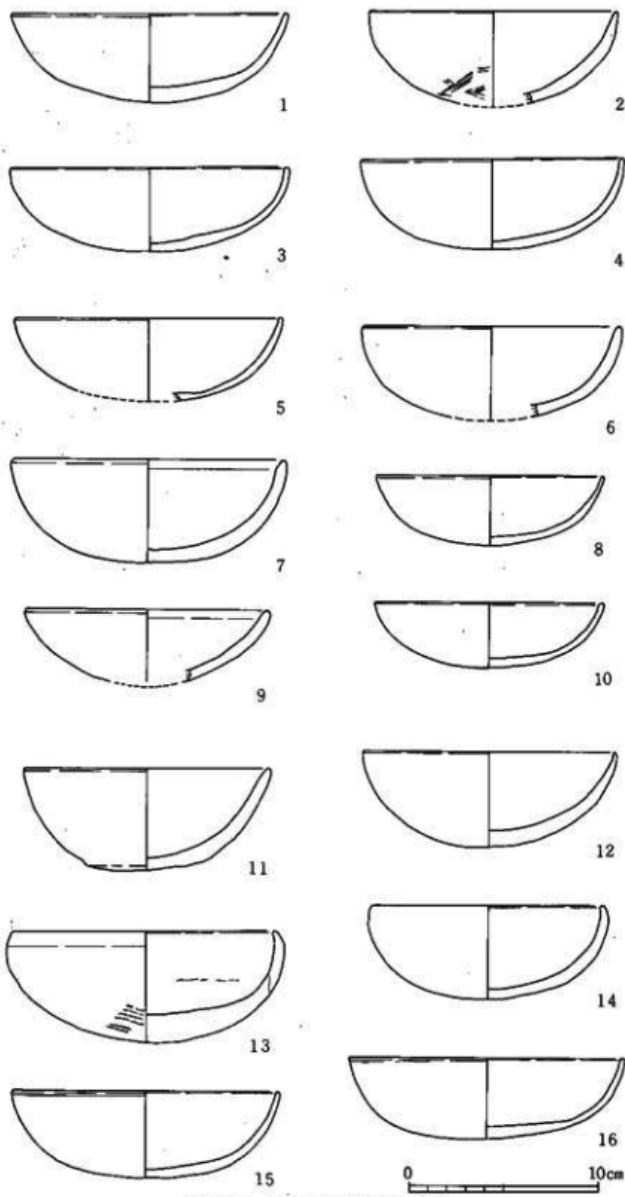
第3図 26号住居址出土土器



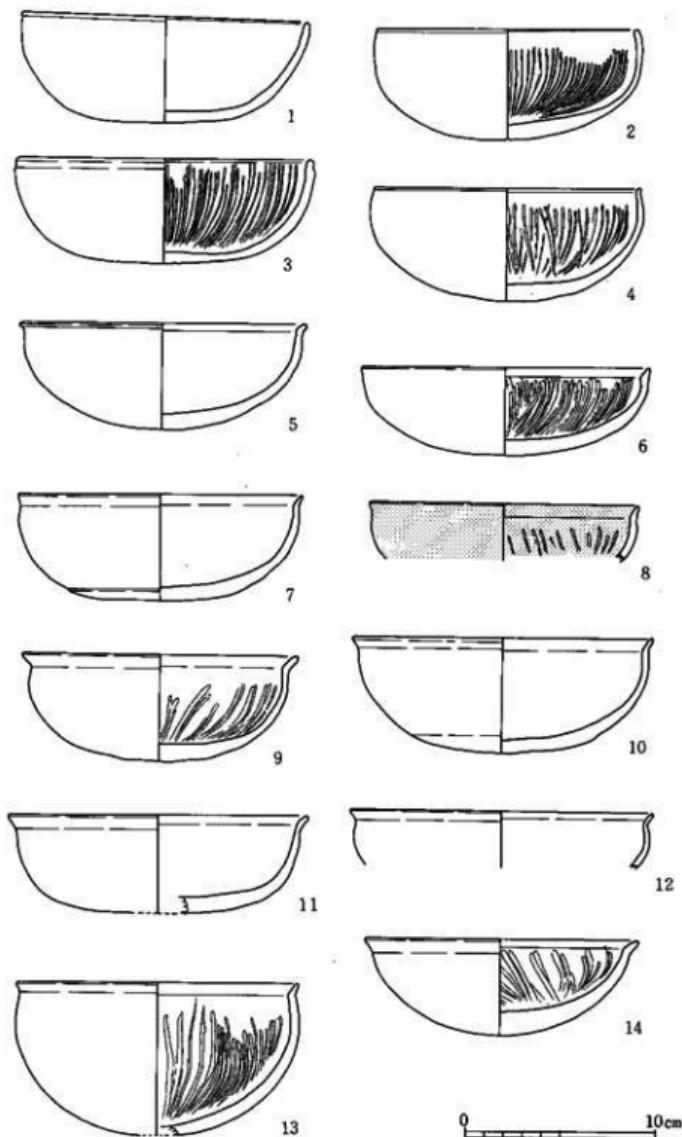
第4図 26号住居址出土土器



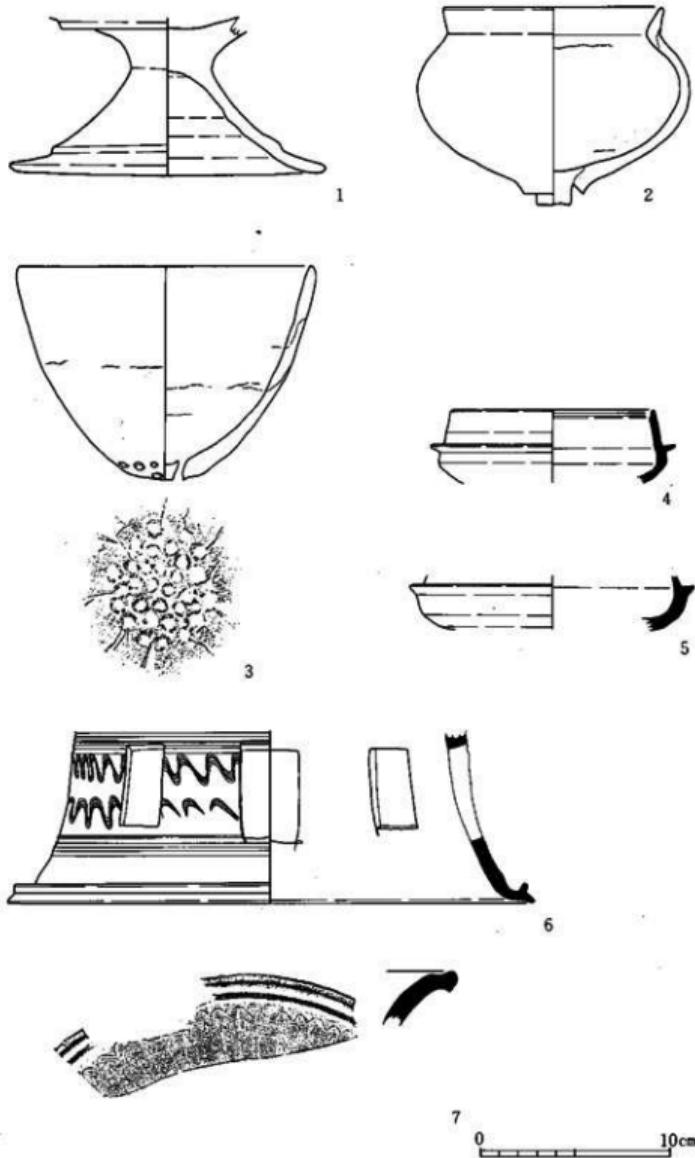
第5図 26号住居址出土土器



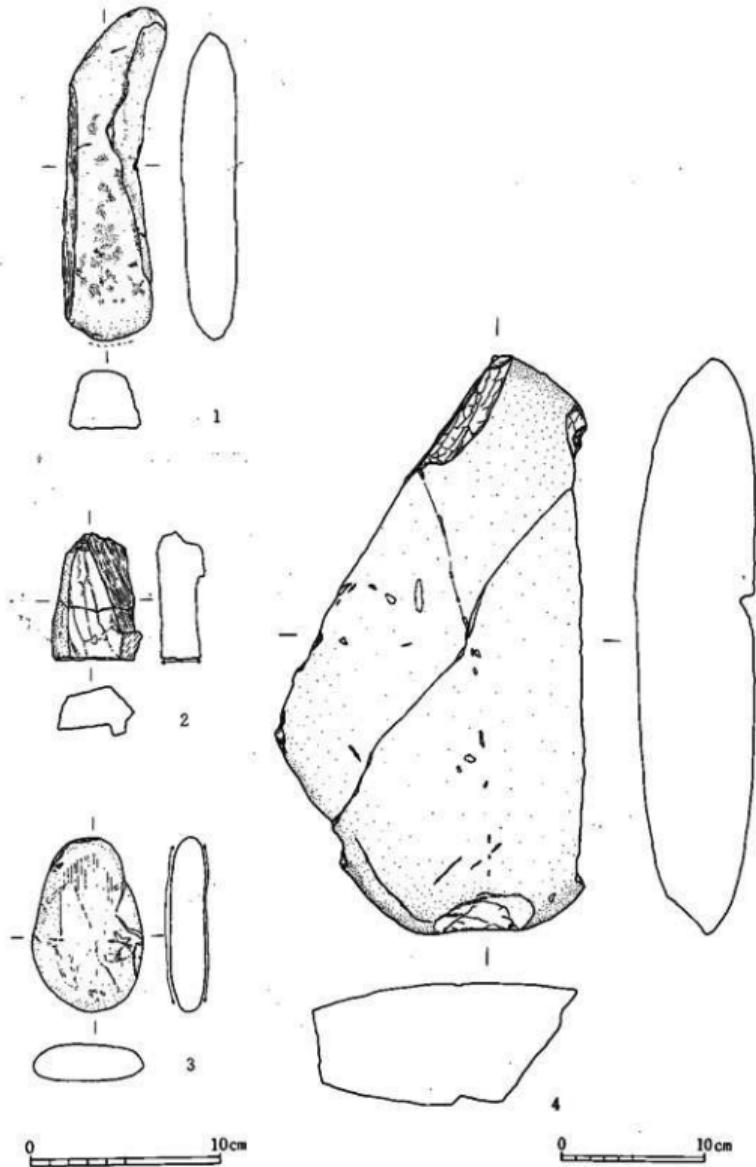
第6図 26号住居址出土土器



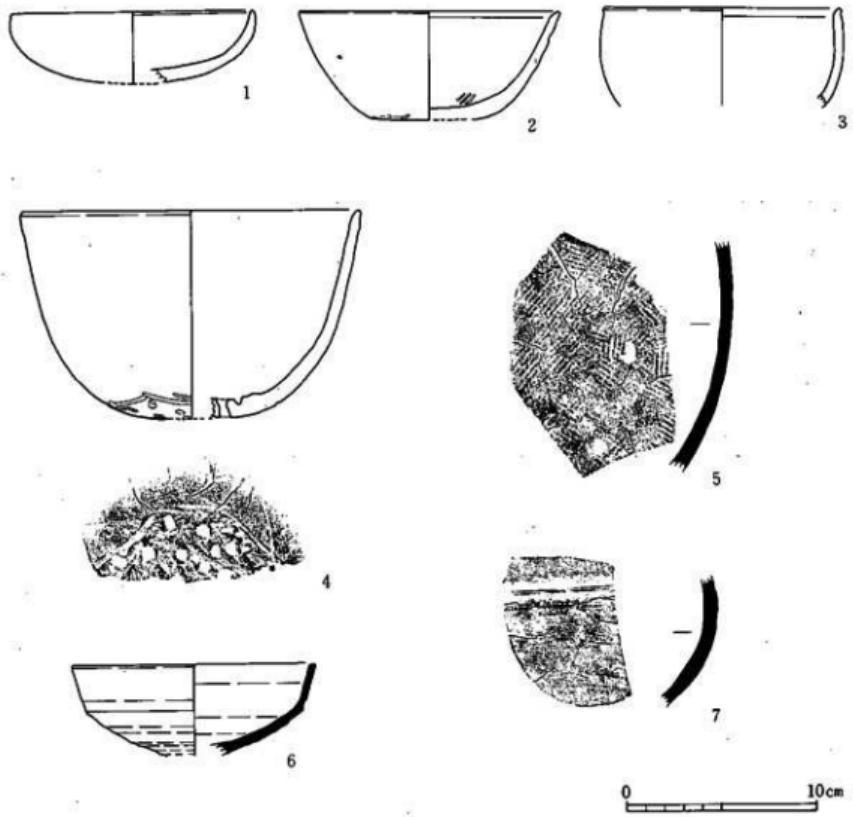
第7図 26号住居址出土土器



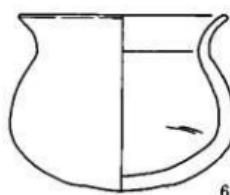
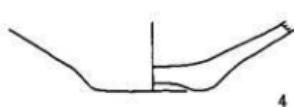
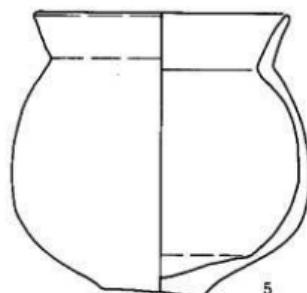
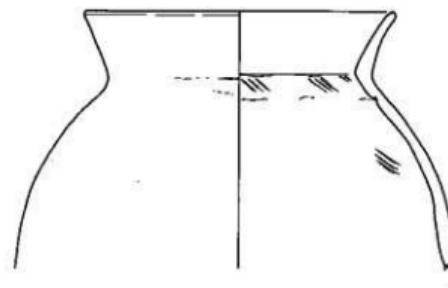
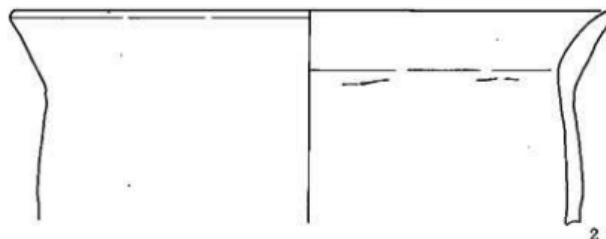
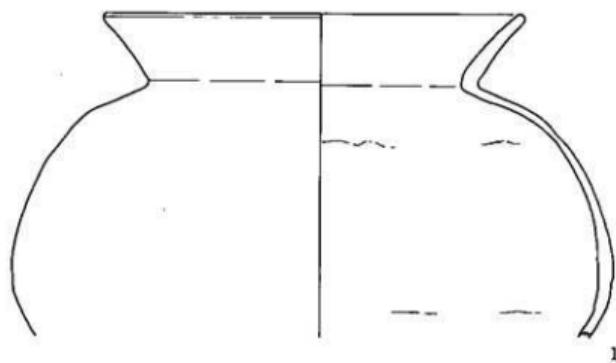
第8図 26号住居址出土土器



第9図 26号住居址出土石器

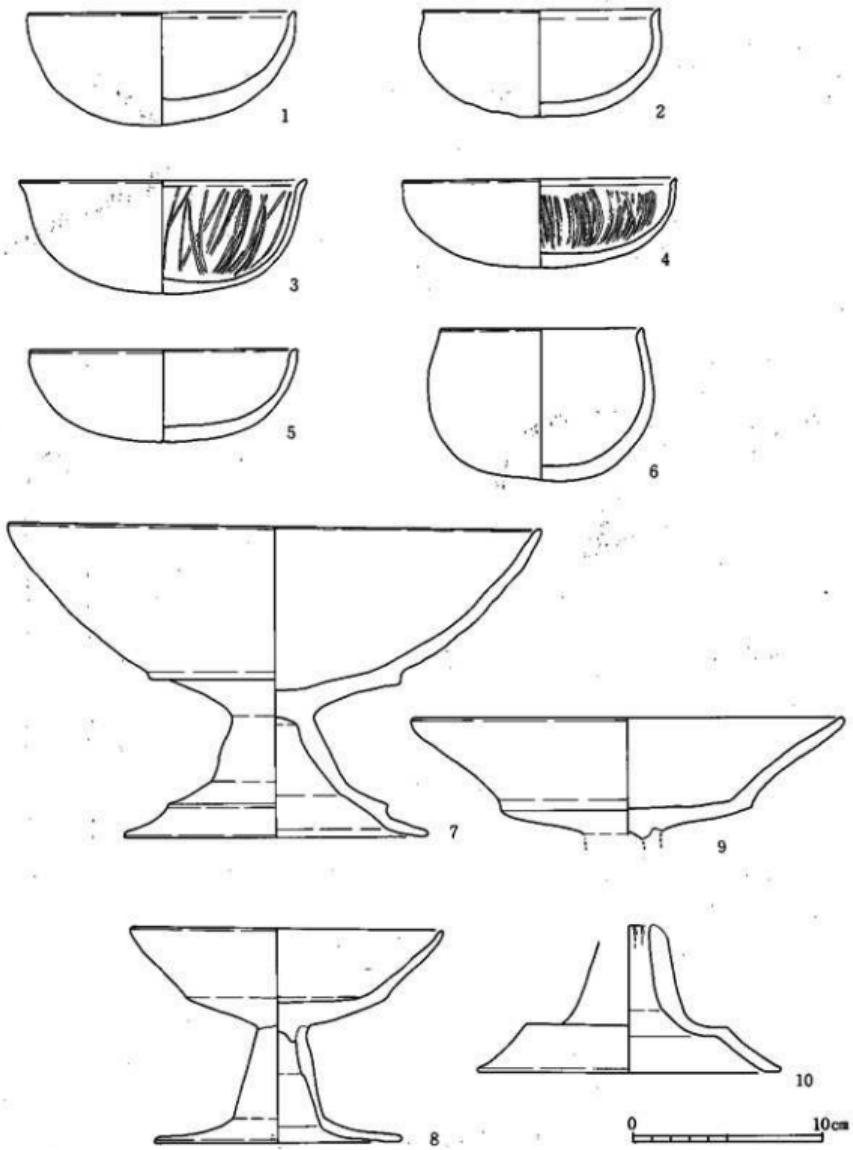


第10図 27号住居址出土土器

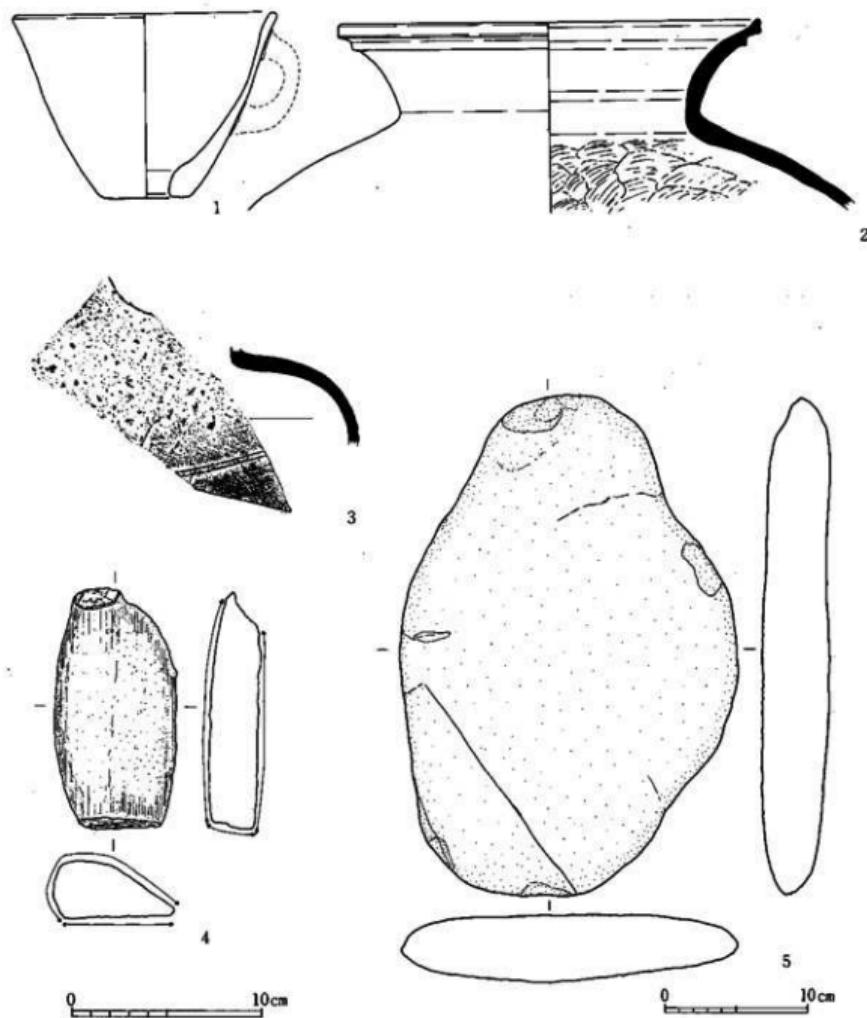


0 10cm

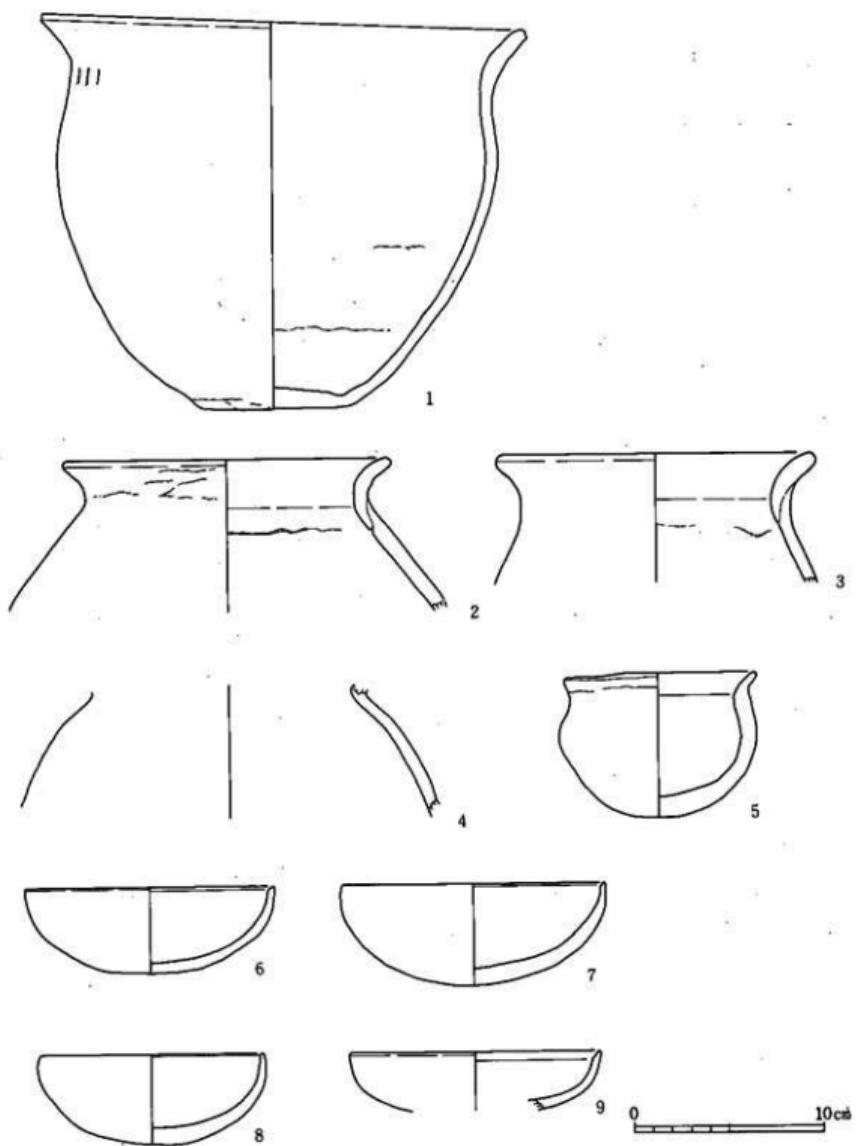
第11図 28号住居址出土土器



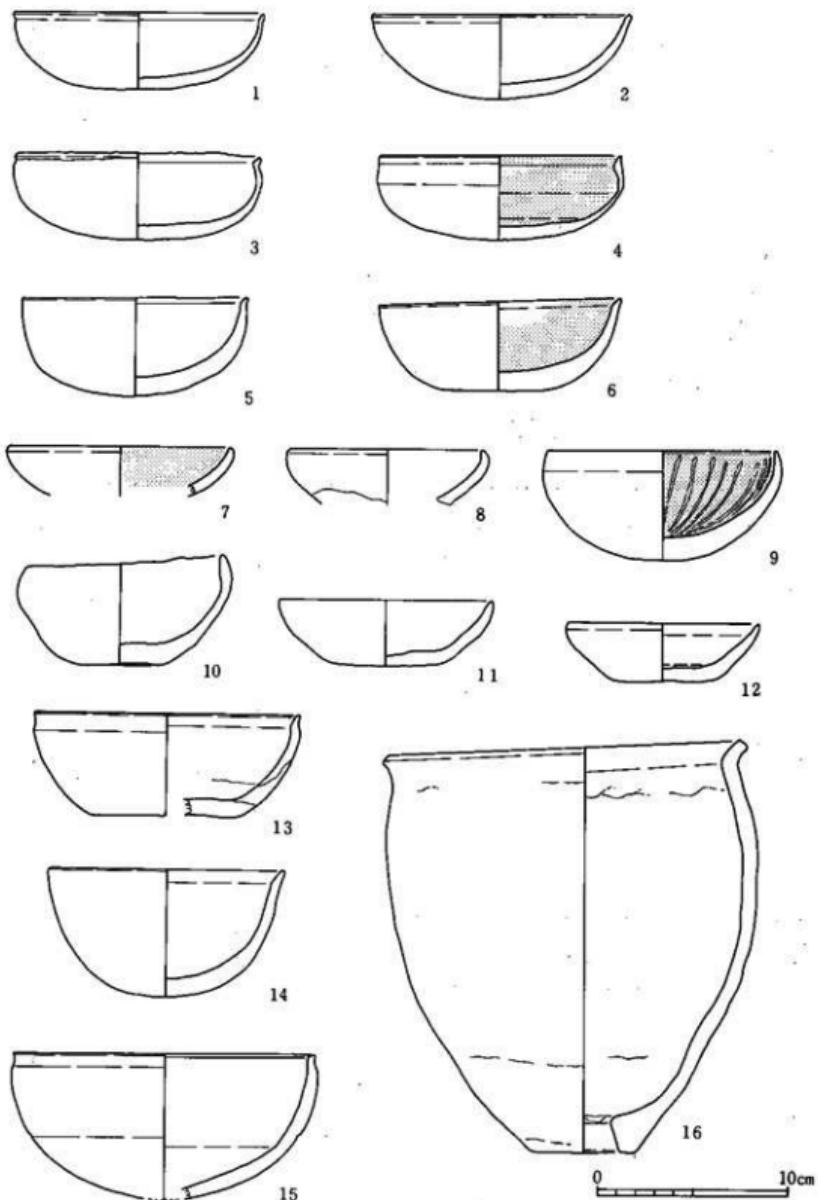
第12図 28号住居址出土土器



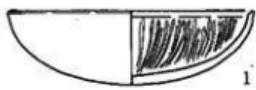
第13図 28号住居址出土土器・石器



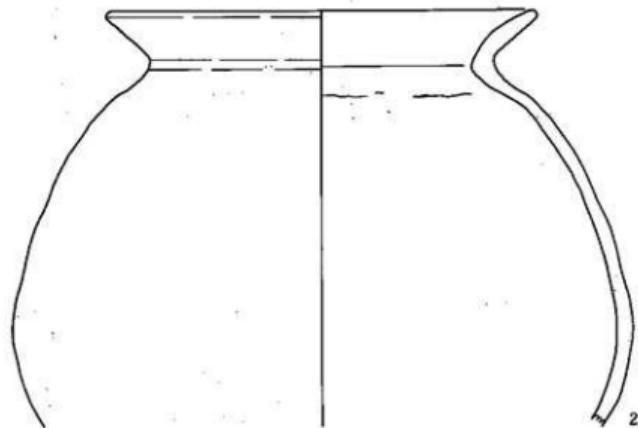
第14図 29号住居址出土土器



第15図 29号住居址出土土器



1



2



3



4



5



6



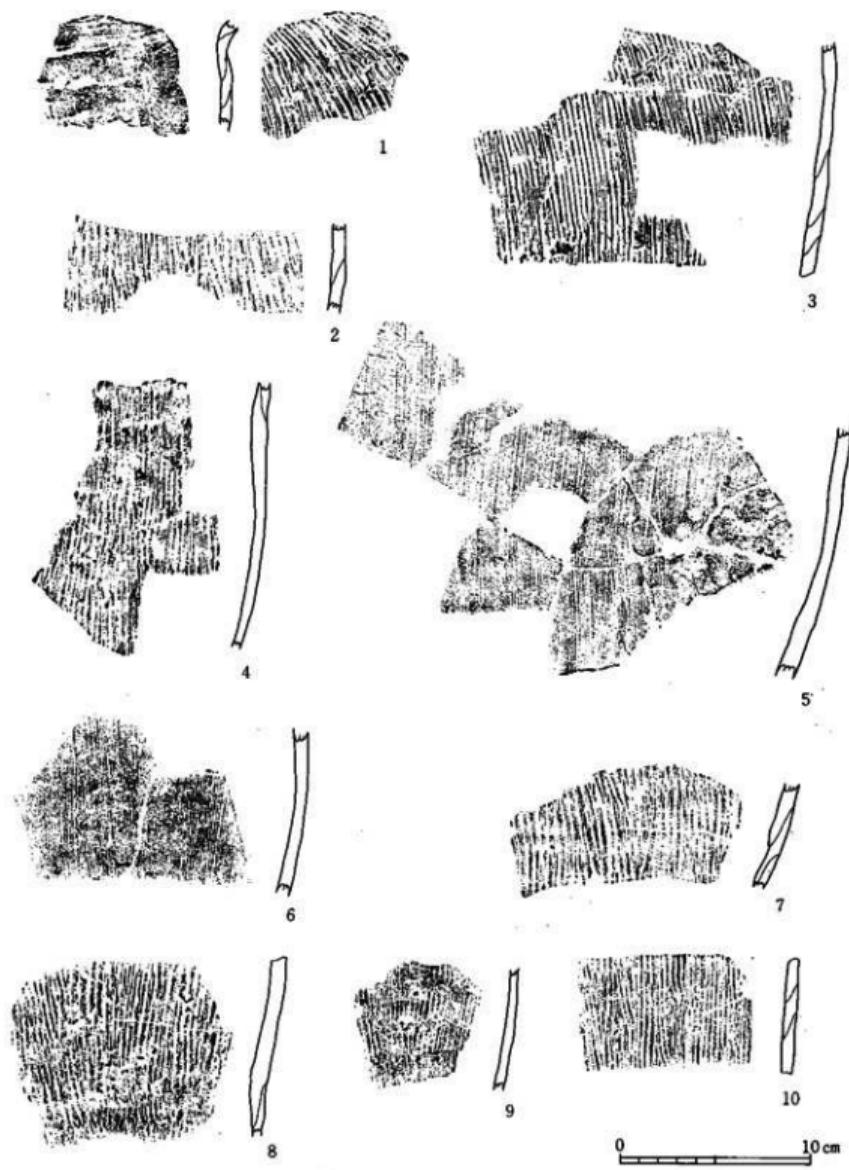
7



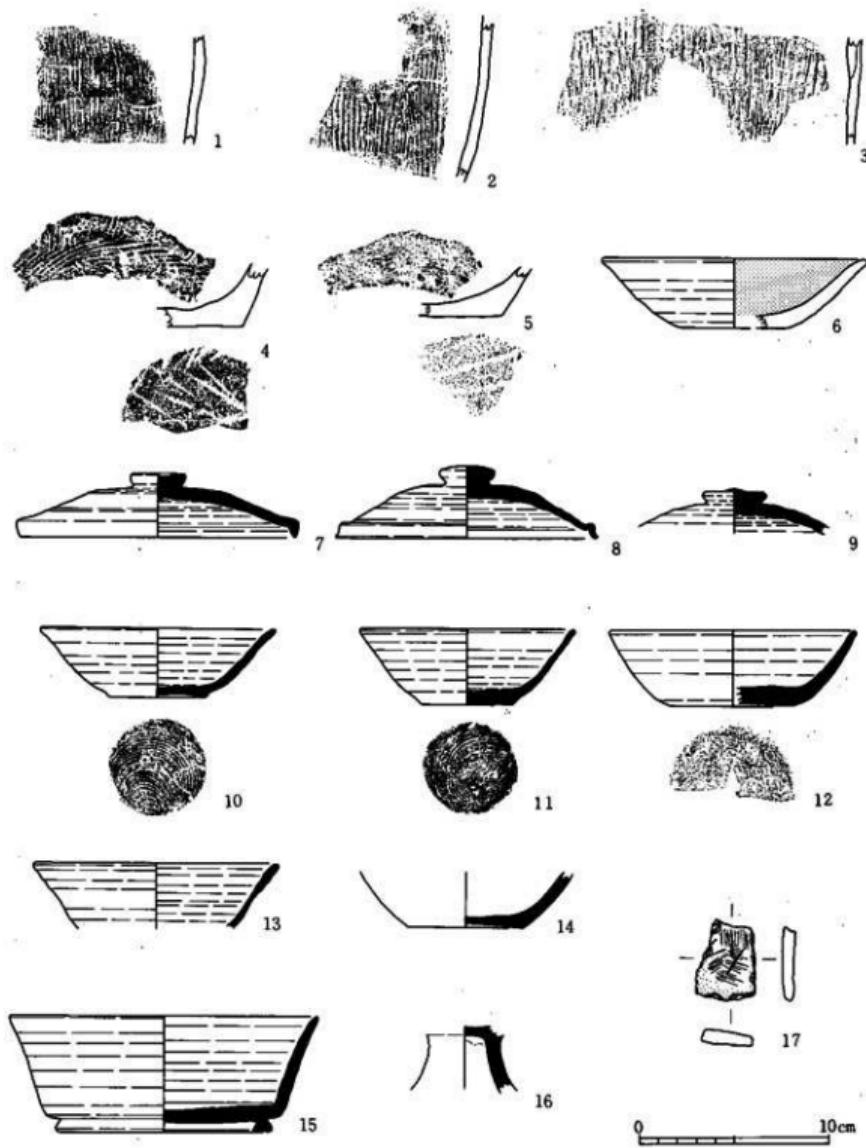
8

10cm

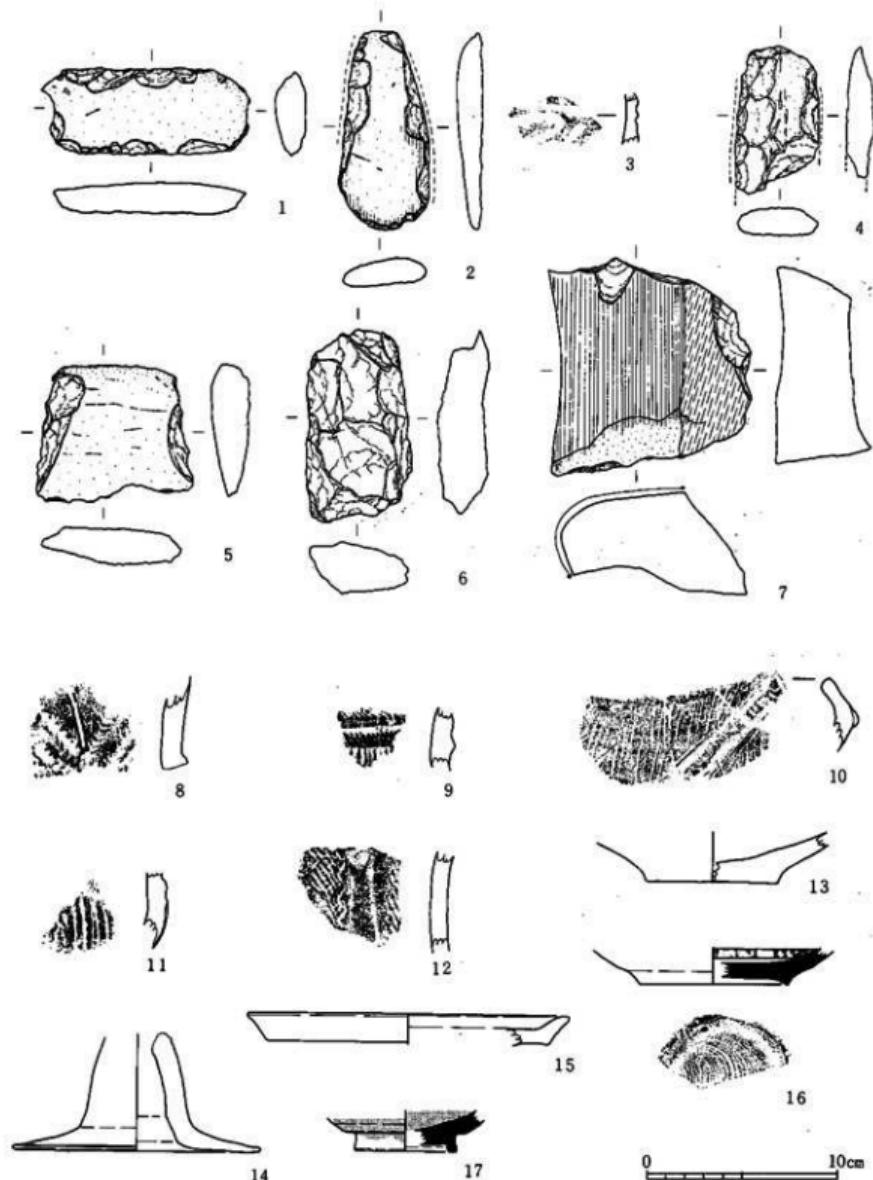
第16図 30号住居址・竪穴1・集石1出土土器 (1 30住、2 竪穴1、3~7 集石1)



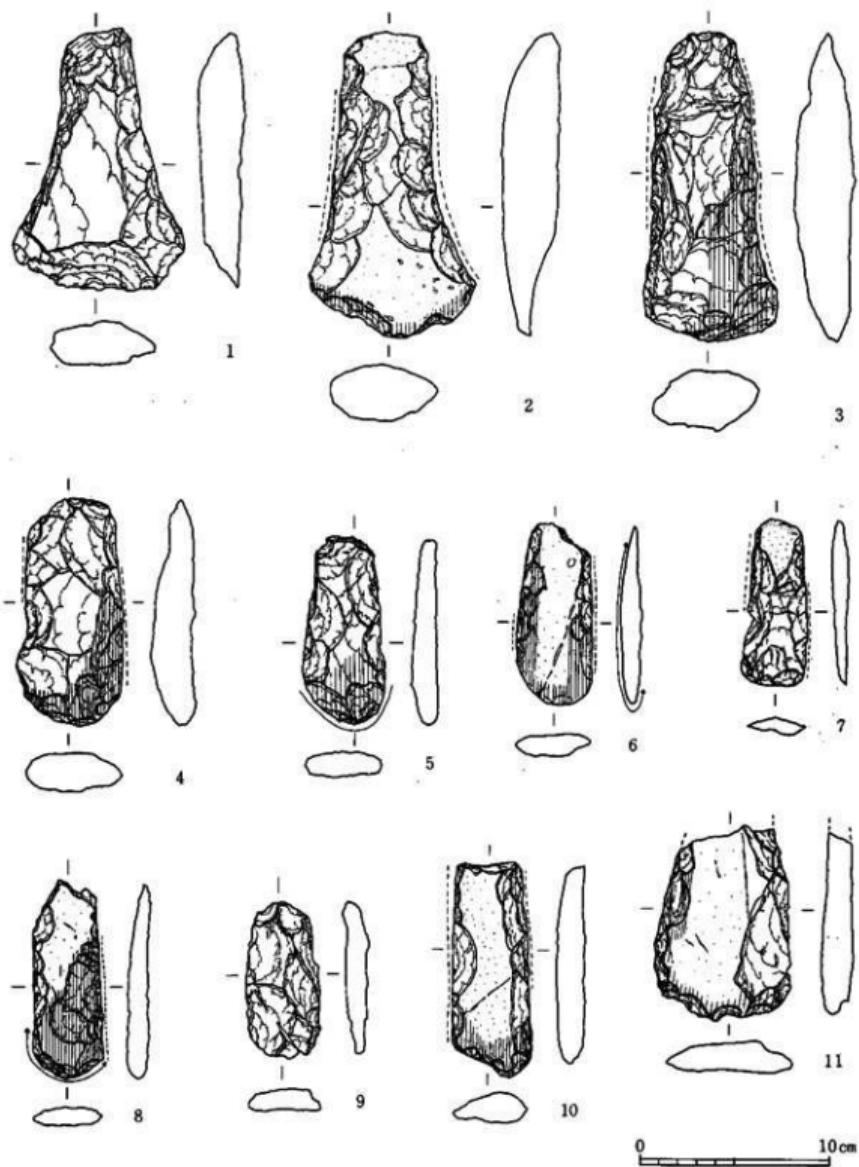
第17図 集石1出土土器



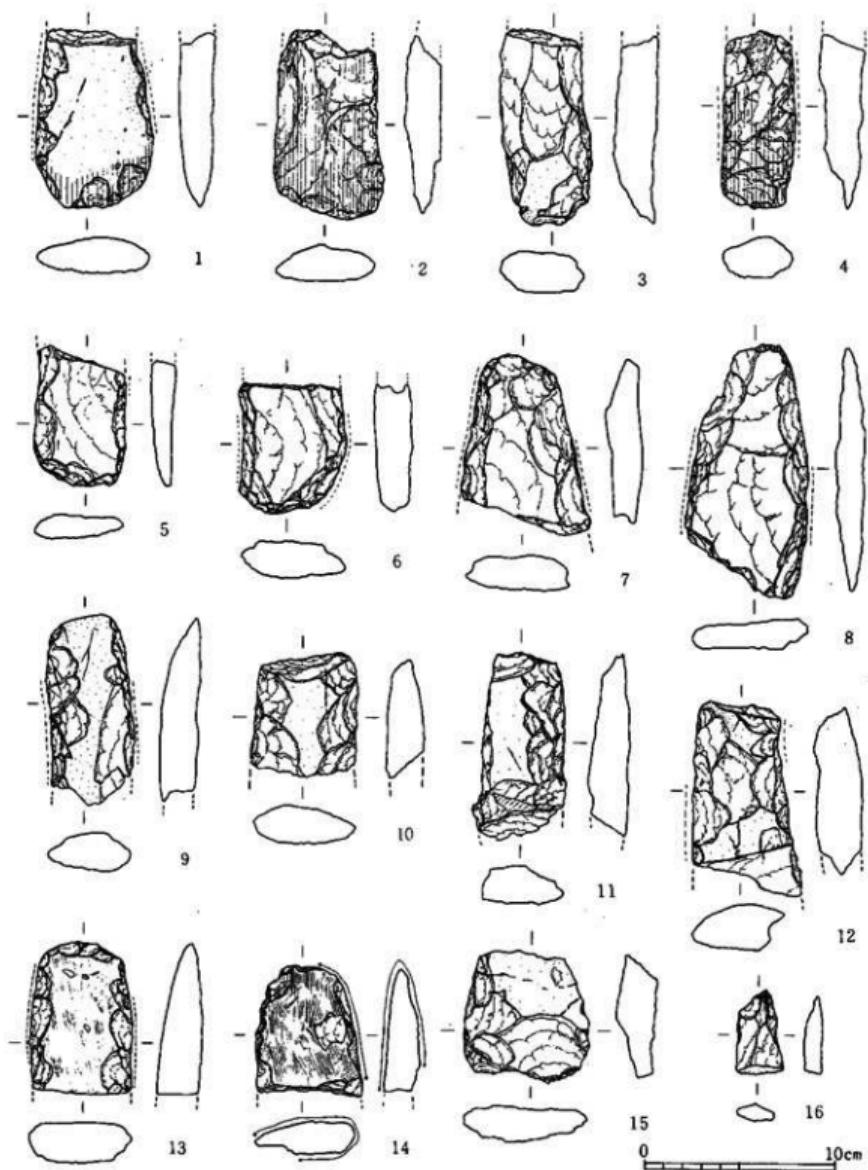
第18図 集石1出土土器・石器



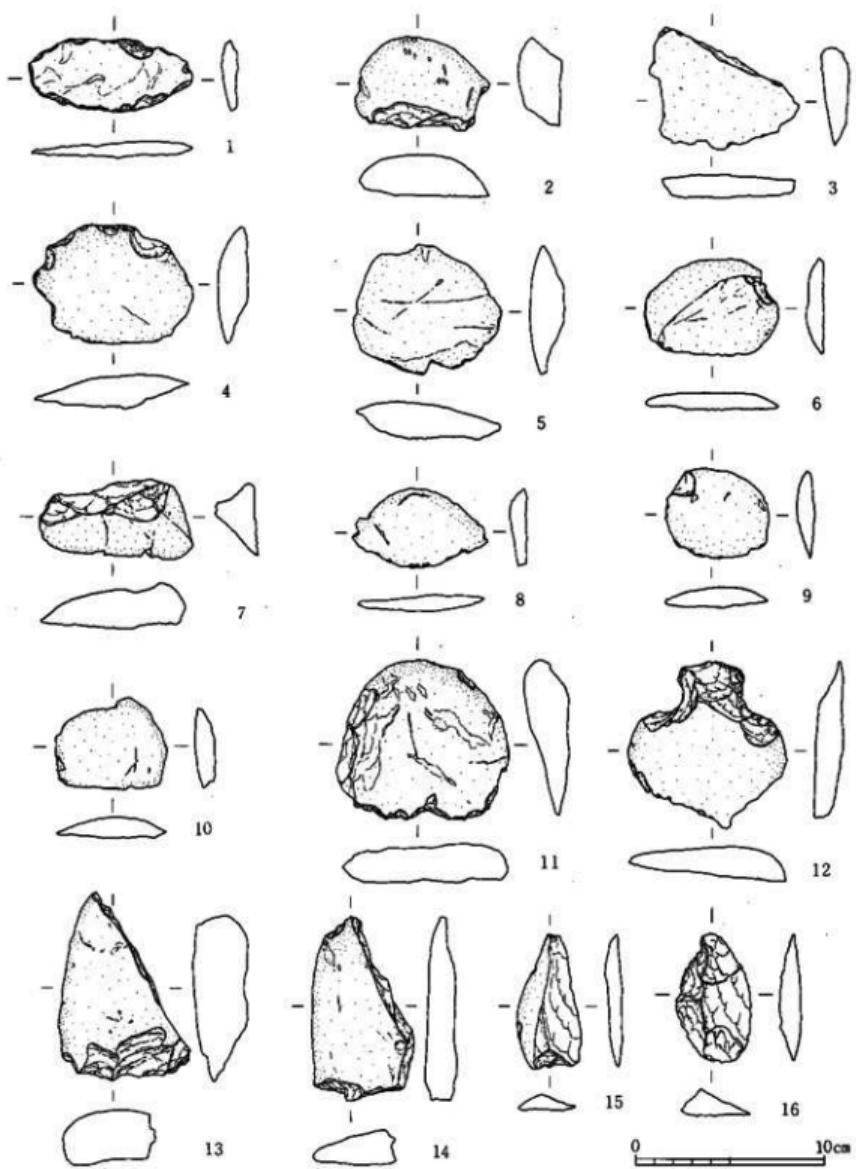
第19図 土坑13・16～19、遺構外出土土器・石器  
 (1 土13、2 土16、3・4土17、5 土18、6・7土19、8～17遺構外)



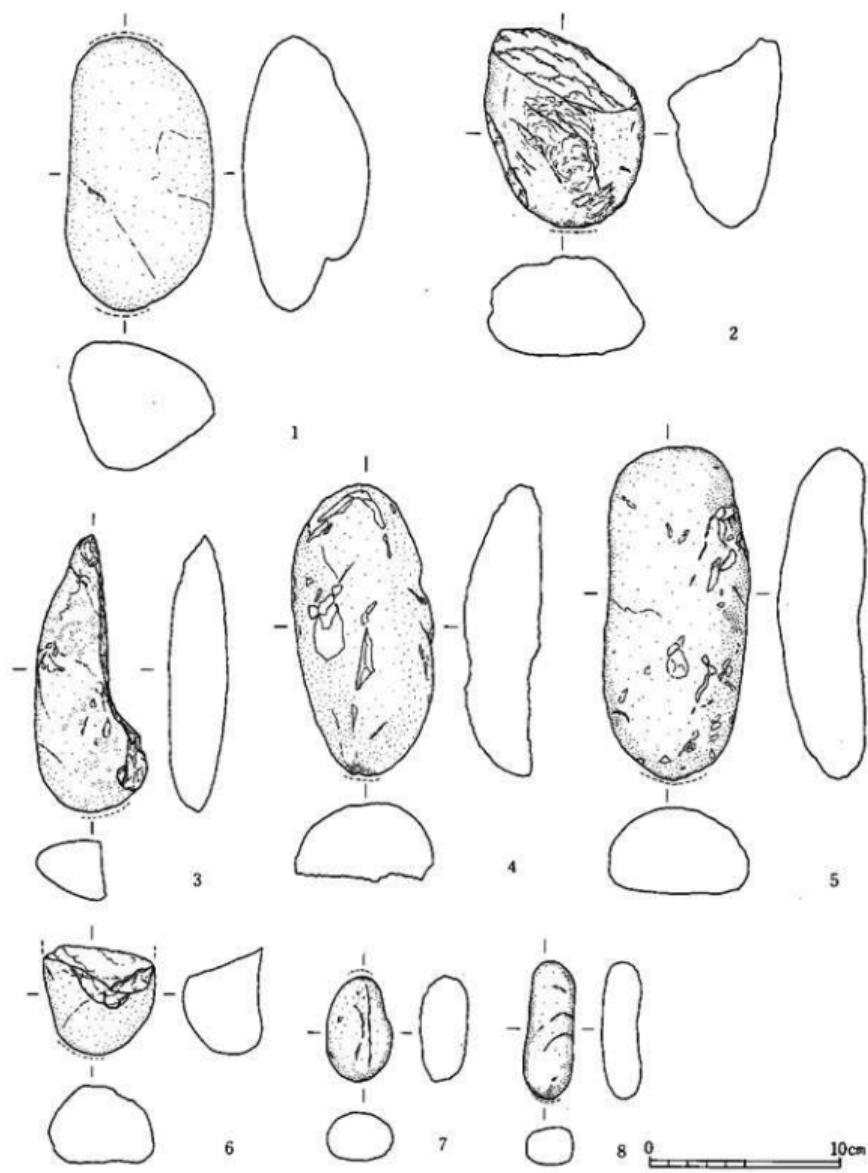
第20図 造構外出土石器



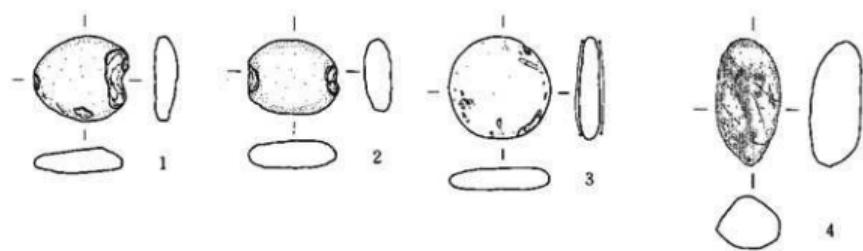
第21図 造構外出土石器



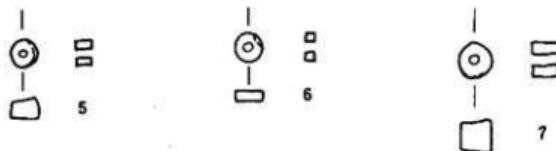
第22図 遺構外出土石器



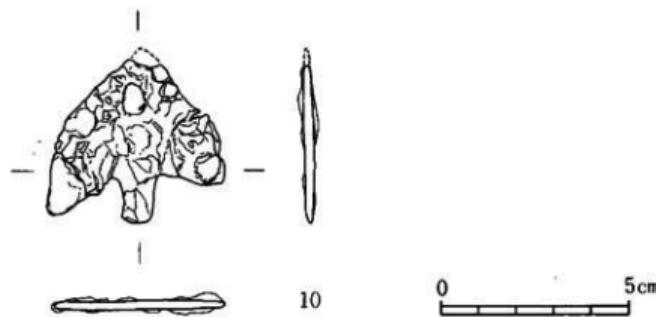
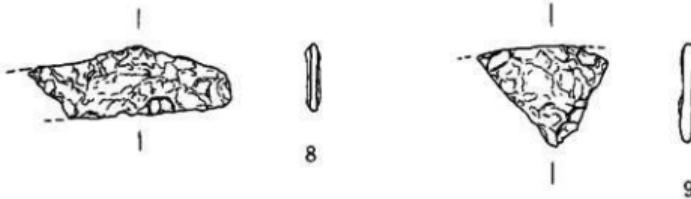
第23図 造構外出土石器



0 10cm



0 5cm



0 5cm

第24図 26・27号住居址、造構外出土遺物  
(1~4 造構外、5・6 26住、7 27住、8・9 26住、10 27住)

# 写 真 図 版

図版 1



遺構分布状況



同上



25号住居址



同カマド



同カマド断面

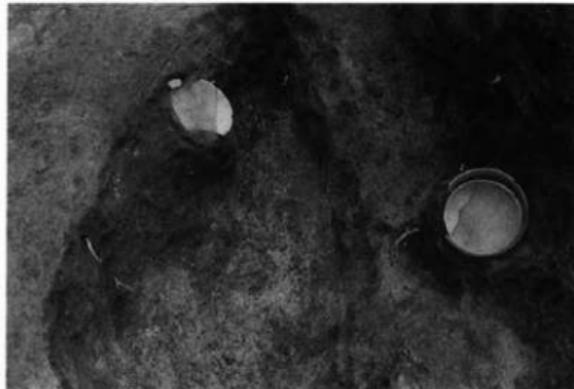
図版 3



26号住居址



同カマド



26号住居址  
遗物出土状态



同上

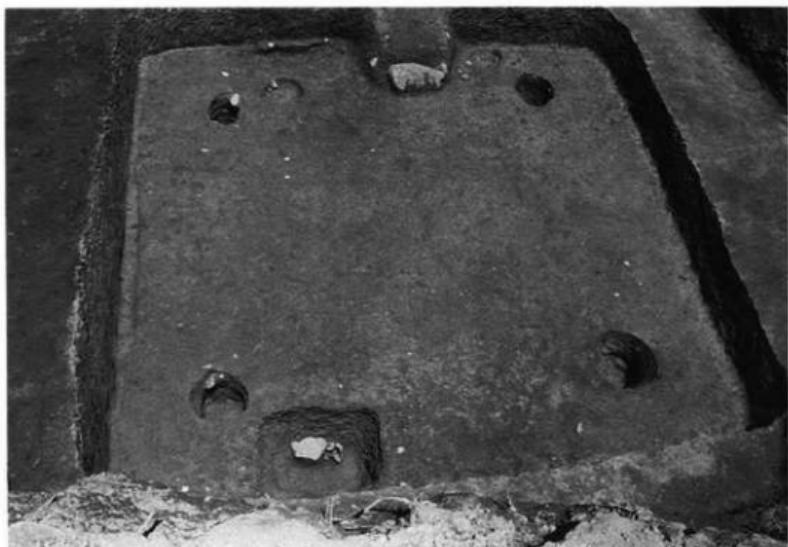


同上

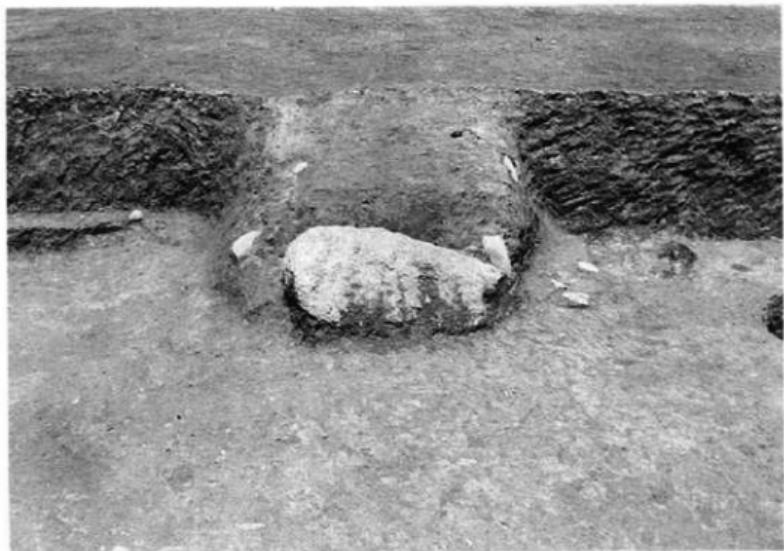
图版 5



27号住居址



28号住居址



28号住居址カマド



同断面

图版 7

28号住居址  
遗物出土状态



同上

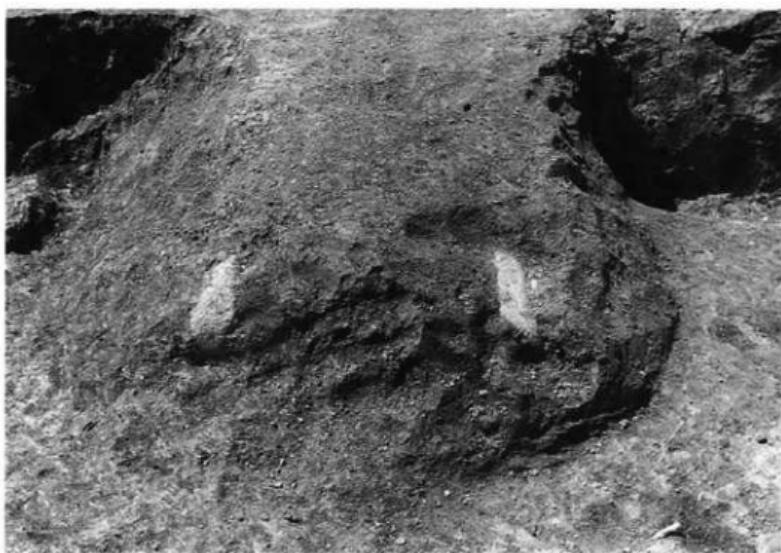


同上





29号住居址



同カマド

图版 9



29号住居址遗物出土状态



30号住居址

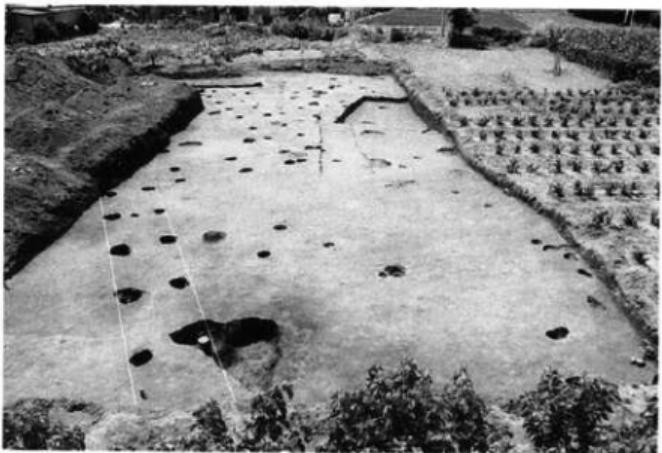


掘立柱建物址 1

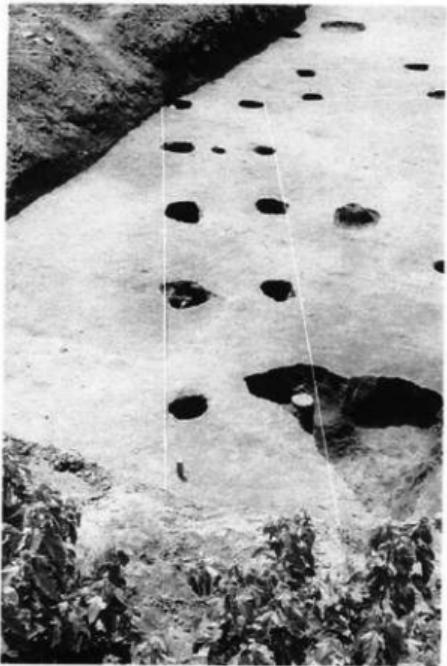


掘立柱建物  
址 2

図版11



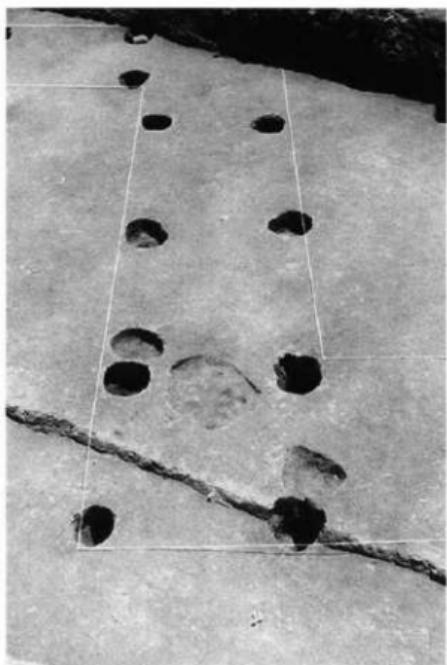
柱列址 3・4



柱列址 3

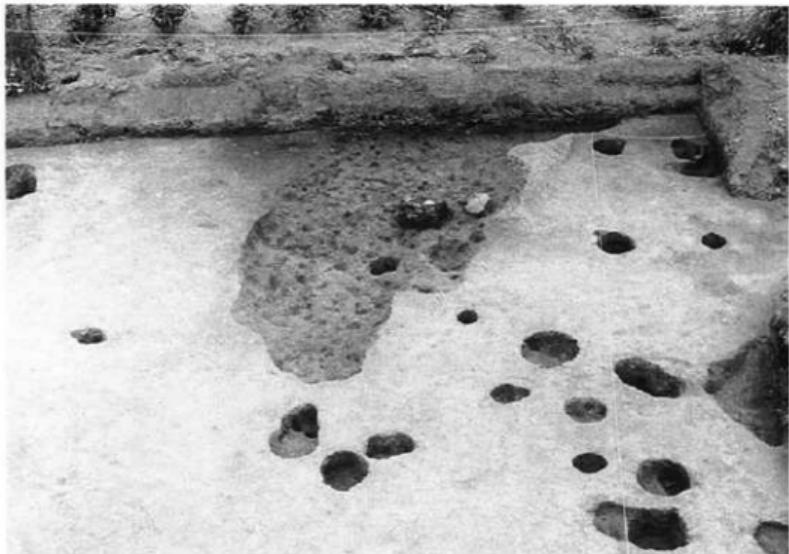


柱列址 4



柱列址 3・4 接点

図版13



竪穴 1



集石 1



土坑12

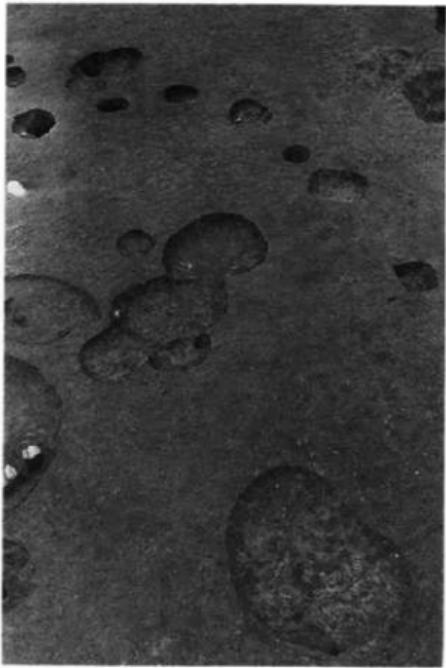


土坑13・14

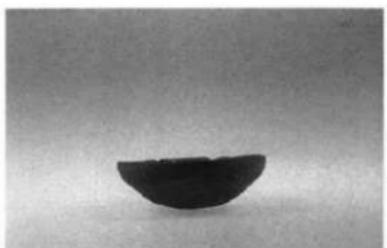
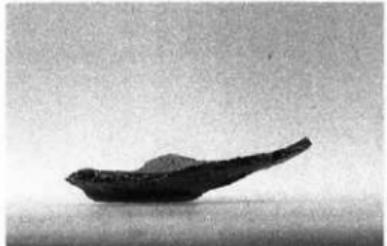
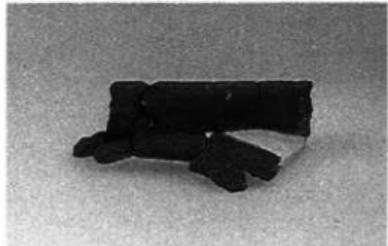
図版15



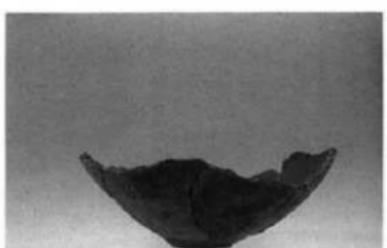
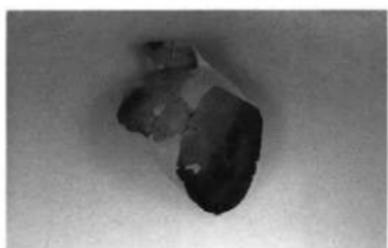
土坑15



土坑17~19

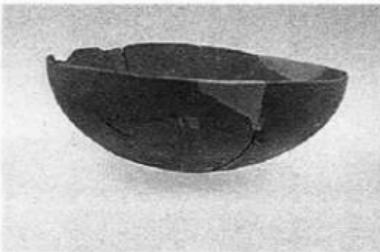
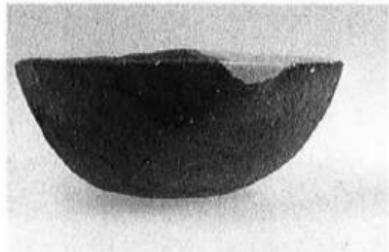


25号住居址出土土器

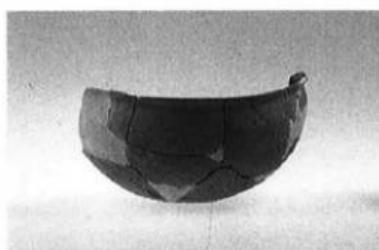
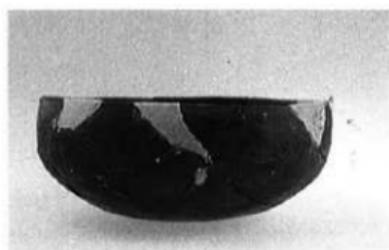
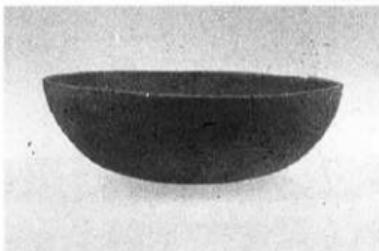
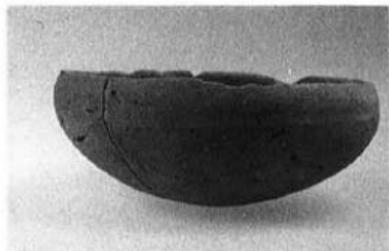


26号住居址出土土器

图版17

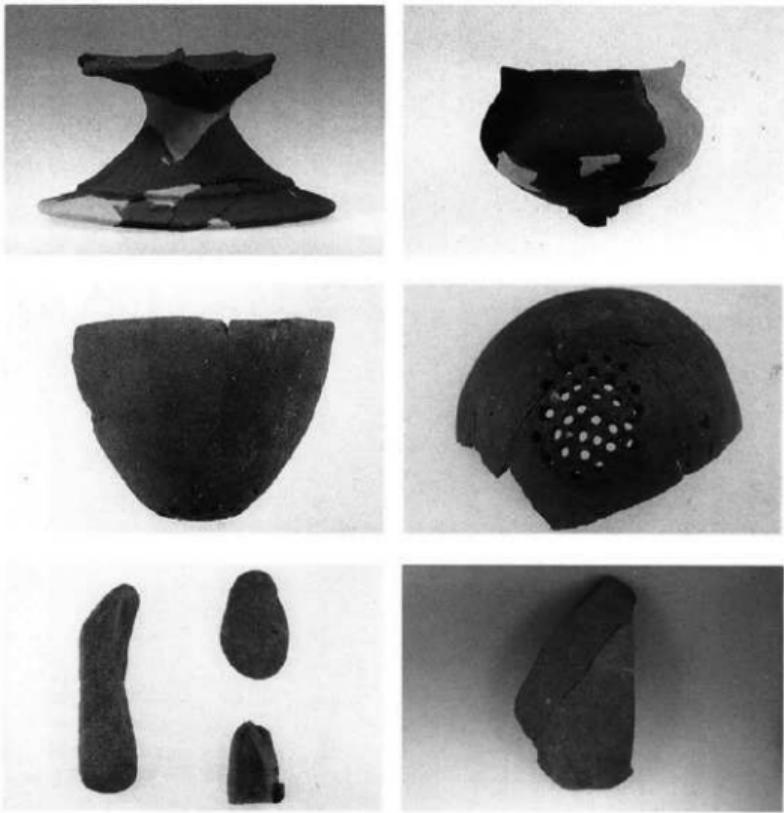


26号住居址出土土器



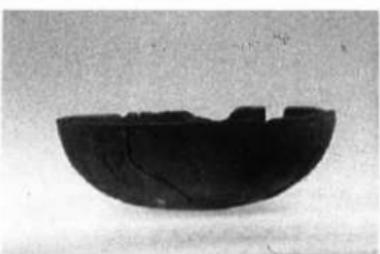
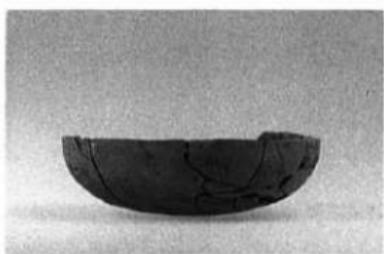
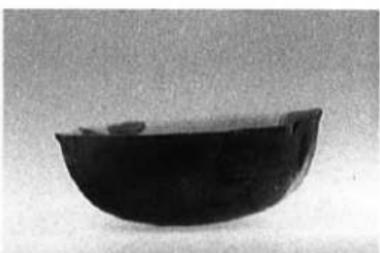
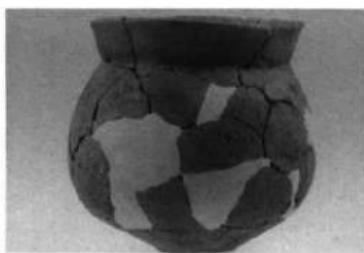
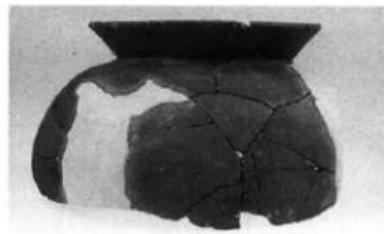
26号住居址出土土器

図版19



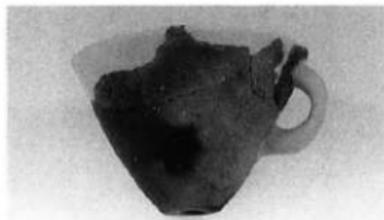
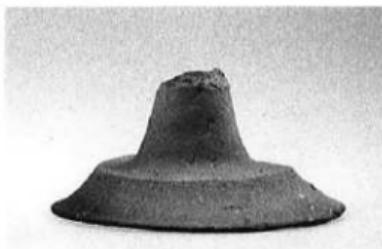
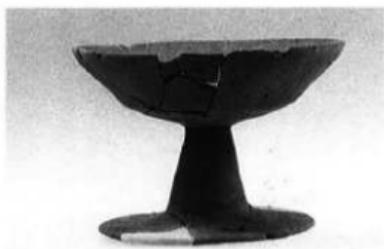
26号住居址出土土器・石器

27号住居址出土土器

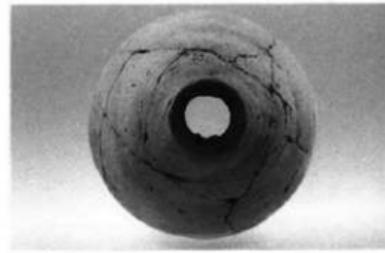
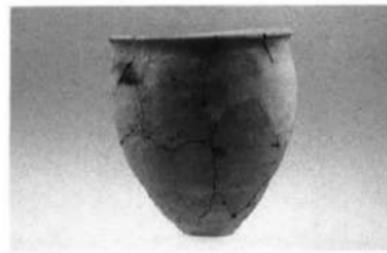
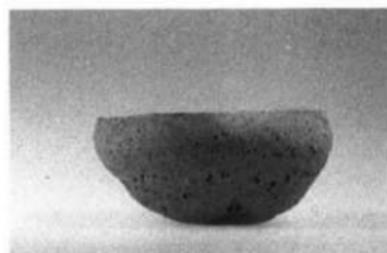
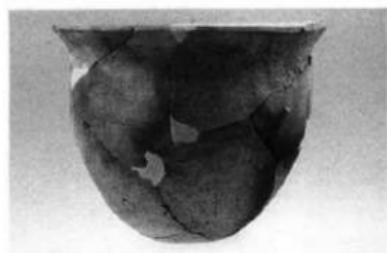


28号住居址出土土器

图版21



28号住居址出土土器・石器

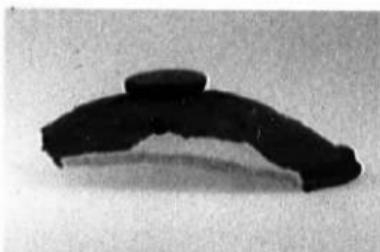


29号住居址出土土器

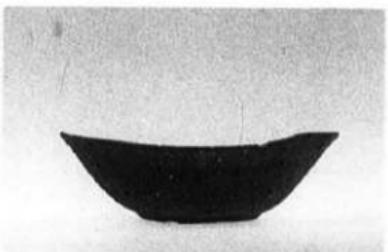
图版23



竖穴1出土土器



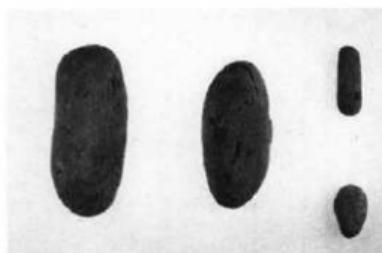
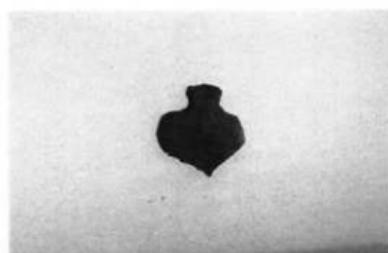
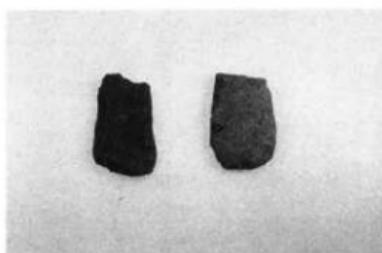
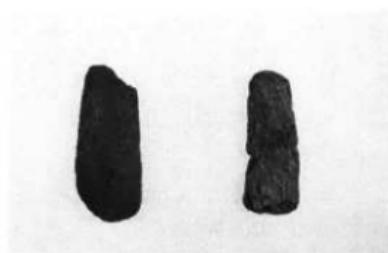
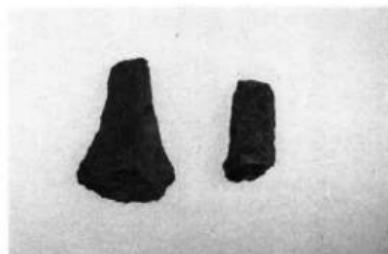
集石1出土土器



集石1出土土器



土坑13·16~18出土石器



遺構外出土石器

26・27号住居址出土鉄製品

図版25



試掘調査風景



表土除去作業



発掘調査風景



同上

図版27



発掘調査風景



現地説明会風景

---

## 前の原遺跡

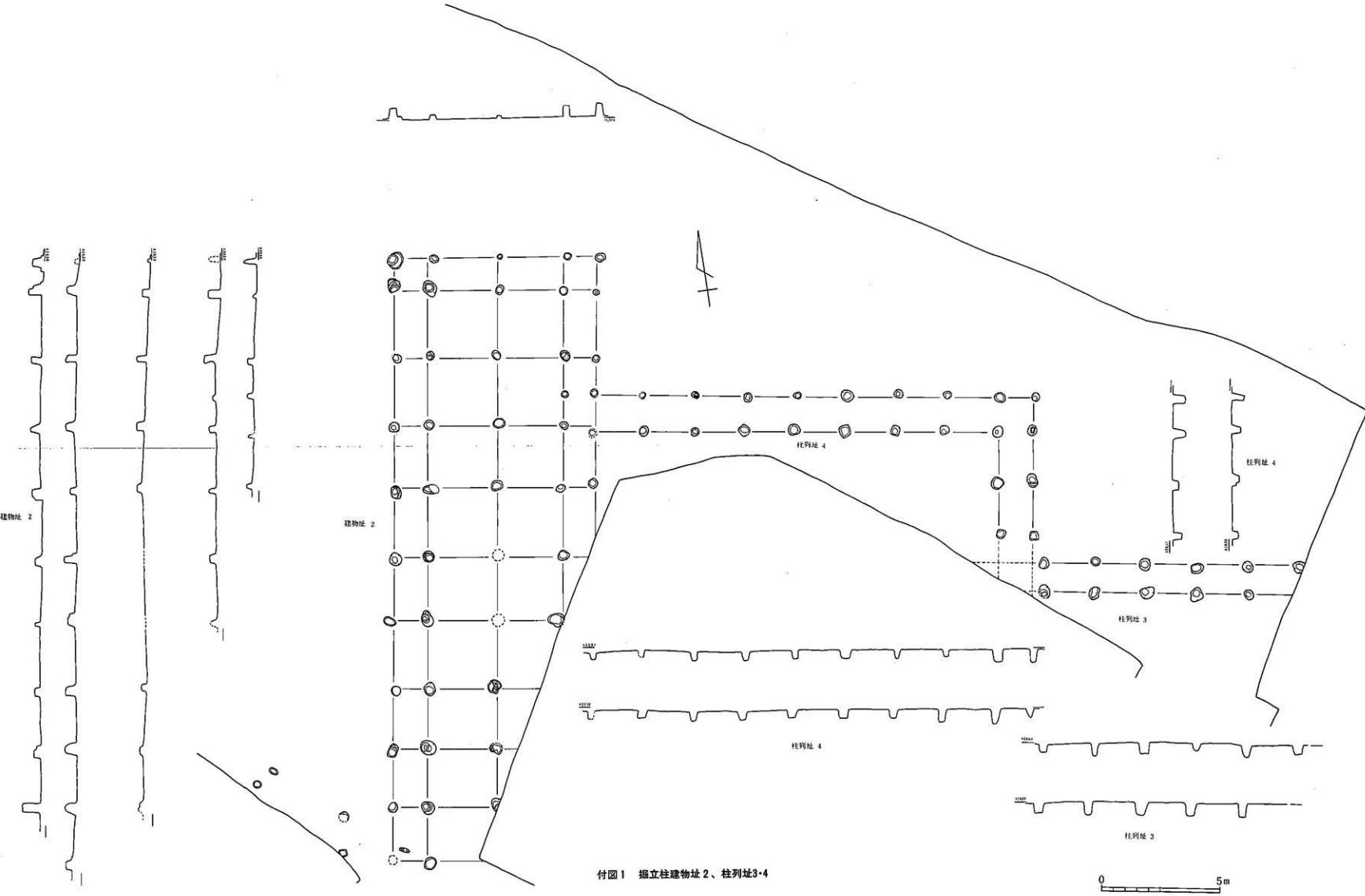
飯田市竜丘保育園移転新築工事に伴う  
埋蔵文化包藏地緊急発掘調査報告書

1990年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地  
飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社

---



付図1 掘立柱建物址 2、柱列址3・4

0 5m

